

第五〇号



2003

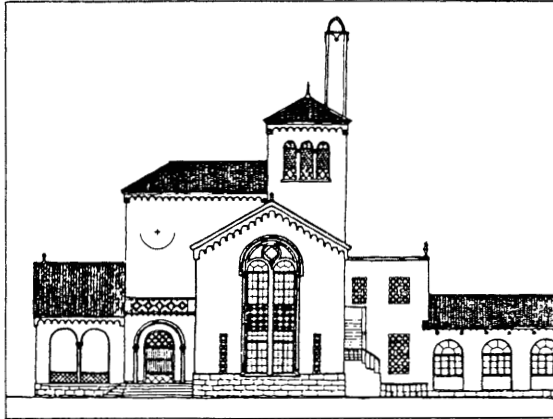
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人文 第五〇号

2002年1月—2002年12月

も く じ



随想	1
学者たちの息吹き	1
拓本の保存	1
富谷 至	1
夏期公開講座	7
生活の中の植民地主義(水野)	7
開所記念講演会	9
元代江南の禪宗と日本五山(古松)／漢字コードの誕生	9
(安岡)／中原中也とランボー(宇佐美)	9
退官記念講演	14
ヒンドゥークシユ南北の考古学(桑山)	14
彙報	16
人文研の「たからもの」	16
よみがえった《縄文記号》——須田勉太の二点の絵画	28
高階絵里加	28
共同研究の話題	32
無秩序の秩序	32
岩井 茂樹	32
目から鱗をとる	32
岡田 暁生	32
「国家形成の比較研究」	32
前川 和也	32
「元代の社会と文化」班	32
金 文京	32
所のうち・そと	37
赴任前後の雑談雑感	37
宮宅 潔	37
「マカロニ・パブル」	37
坂本優一郎	37
日本語と鼻音	37
堂山英次郎	37
相互乗り入れの魅力	37
守岡 知彦	37
ひっくりかえった葡萄棚の謎	37
宮 紀子	37
懸泉随想	37
藤井 律之	37
伝承と再創造	37
後藤 静夫	37
書いたもの一覧	46

学者たちの息吹き

小南 一郎

論文を書くため、あるいは報告をするためといった目的をもつて書物を読むことは、みにくい読書だと、恩師の吉川幸次郎教授に戒められてから、すでに三十年以上の月日が経った。しかし、あいも変わらず、迫られてする読書ばかりで、無償の読書を楽しむ余裕はほとんど見つけられない。ただ、若い時代の読書に比べれば、自分自身を無にして筆者の言うことを聴こうとする姿勢を取ることが、少しずつ可能になってきたとも思う。

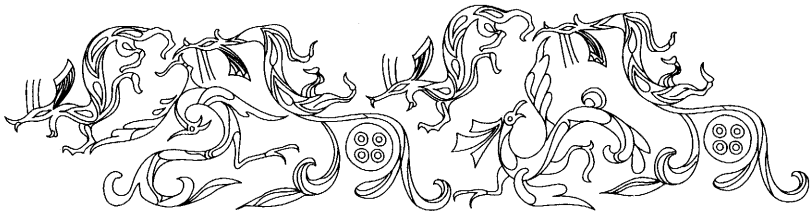
古典学という学問に対する普遍的な定義がどのようなものであるかは詳らかにしないのであるが、この学問の基礎が、古い時代の人が表明したものを、その当時の社会や文化の中で理解することにあることは確かであろう。当時の価値体系の中で発言を理解すべきであって、現在の価値観でそれを評論するのは、少なくとも古典学の本務ではないのである。そうした古典学の特徴的な性格は、この学問の中心が、古典籍の注釈にあることに反映しており、その注釈の基礎にはテキストの校定作業がある。古典学のもっとも基礎は、典籍の校定にあると言って良



いだろう。原文を引用する場合にも、最良の版本を選択し、本文に校定を加えねばならないなど、単に校勘記を作ることだけが校定なのではない。

校定は、けっして機械的な仕事ではない。むしろ一人の学者の本質的な性格が表明される作業だということが、最近、ようやく実感されるようになってきた。本文の異同を並べて、A、A'、A、B、B'、B、Xなどの字に作る例があるとき、Aの系統の本文とBの系統の本文とがあつて、その両者の関係から、より古い本文を想定するのが、校定の基本的な作業である。かけ離れた、Xなどと作る例は、無視されるのが普通であろう。しかし、このXに作る例について、なぜそうした本文が生まれたのかを深く考えることによって、A、Bの本文の系統についても、みごとに説明を付けている注釈がある。そうした注釈を読むことが、読書にともなう快感の一つであるにちがいない。

清朝の考証学者の中には、こうした快感を味あわせてくれる、いく人も学者がいる。ただ、その論証のしかたには、それぞれに個性が存在している。真面目一方で、積み木を組み上げるような論証をする学者もおれば、最初に人を驚かせるような結論を挙げたあと、おもむろにそれを説明する学者もいる。後者のような学者は、頭は良いが、いやらしい学者であつたに違いないと実感する。そうした多様なかたちの論証の中に、学問的成果とは異なつた、学者としての生きた息吹きとも言うべきものを感じるのである。学者の伝記の中に、誰々先生の声咳に接



したと、わざわざ記されるのも、そうした息吹きに直接に触れることの重要さを知っておればこそであったのだろう。

中国文化の厚みを反映して、古典への注釈書の数は多い。ただ、本当に役に立つ注釈書は必ずしも多くないように思う。多弁でありながら、もっとも肝心なところには、なにも言及がないといった注釈書が少なくない。そうした時、段玉裁はどう言っているだろう、王念孫はどう説明しているであろうと思ひ、その意見を徴してみると、必ず答えてくれる学者たちがいる。その答えが、この本文にはなにか問題があるに違いないという言葉だけであつても、わたしもまた、こうした学者たちと疑問を共にしているのだという、密かな喜びをもたらしてくれる。こうした古い学者たちとの交渉の中で、時に、過去の学者たちの息吹きを感じるのである。それが、わたしの読書の深まりを反映するのではないかと、密かに思う。ただ、残念なことに、優れた古典学者であれば、古い学者たちの息吹きを、日常的に感じつつ研究をしているのであろうが、わたしの読書は、まだまだそこには及ばない。

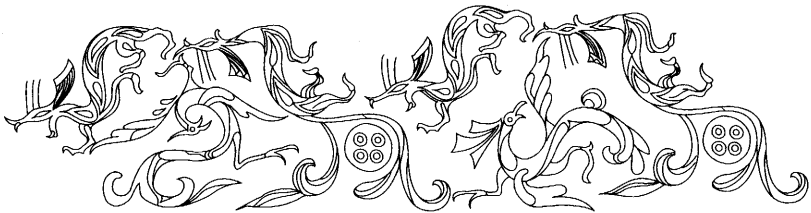


拓本の保存

富谷 至

共同研究班「三国時代の出土文字資料」（二〇〇〇—二〇〇五）では、昨年二〇〇二年一月三〇日に公開シンポジウム「石刻が語る三国時代」を開催した。三国時代を概観する講演を二つ、個別の石刻に関する研究発表を三つ準備し、同時に関連する六本の拓本を展示したのである。

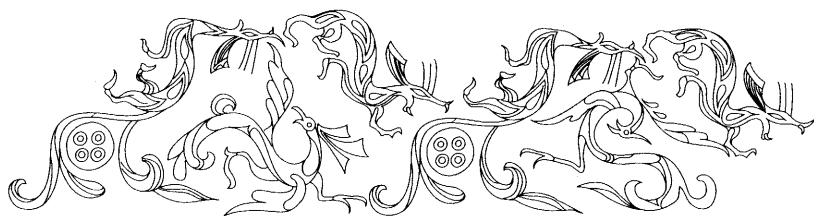
我が京都大学人文科学研究所は約一万点にのぼる石刻拓本のコレクションを有し、これは日本国内でも誇るべき研究資料といて過言でない。ここ二・三年前から、研究所のホームページでその画像を公開しつつあり、現在、魏晋南北朝期まで進み、以後の時代に関しても順次公開画像を加えて行くつもりでいる。画像データとその公開は研究資料を広く研究所外の人びとが活用でき、また我々にとっても簡便に利用できることは、何よりも有り難い。なにしろ拓本は、大きなものは二メートル以上もありそれをいちいち広げて見、終れば元通りに折りたたんで収納するのは、大変であり、その出し入れの面倒くささを考えただけでやる気がなくなってくるのだから。



しかし、考古文物の研究において、写真もふくめて画像データの資料的価値は、実物をもつその二割程度でしかないということを念頭に入れておかねばならない。そこに書かれている字が実物でははっきり見えるからと言うことではない。拓本などについて言えばむしろコントラストの処理が可能な画像データをのほう鮮明になることもある。実物と画像の根本的な違いは、前者は立体的な資料であるのにたいして後者が平面的資料でしかない点に存する。立体がもつ資料的価値を画像は全くもたない、これは画像のどうしようもない致命的な点である。たとえ、「立体画像」と言ったものがあっても、所詮それは「立体的な画像」でしかない。

拓本について最も単純なことをいえば、画像ではそれが実際の石から採拓したものか、印刷したコピーなのか知る術はない。何故、同じ石から同時に採拓した異なる拓に精粗の違いが生じるのか、拓本の紙質の違いを示すことができない画像は語ってくれないのだ。

立体資料としてのかかる考古文物については、そこに保存という問題が加わる。今回のシンポジウムでは拓本を展覧したが、それはアクリル板ではさんでパネル状にして展示し、その後もその状態で保存している。しかし、果たして拓本の保存としてそれが最良の方法かどうか、我々には自信がない。研究所所蔵の拓本に坎んして、よくなぜ裏打ちして保存しないのかと問われる。費用の面もさることながら、私は裏打ち保存に対してい



ささか消極的である。拓の裏面が変わってしまう、なくなってしまうということもあるが、一番の不安は現段階では気がつかない、分かっている資料的価値を消滅させてしまうことが恐いのである。分からない資料的価値とはなにか、それが分からないから不安なのである。

例えば、出土した紙文書がある方法で保存処理をしたが、その結果、元もとの紙についていた折り目が消えてしまった。折り目を調べることでその紙文書が何の為にどのように使われていたのかが判明すると言うことが、保存処理の後に分かってきたのである。しかしそれは後の祭りだった。木簡をある方法で保存処理をしたが、その結果、木簡のうえに残っていた古代人の指紋が消えてしまったということが生じるかも知れない（現段階では指紋検出は、行われていないが、将来どうかは分からない）。

保存によって未だ分からない資料的価値がなくなること、保存処理をこうしなければ資料が劣化して終いには資料そのものが無に帰す、矛盾の両者をどうすればよいのか。



講演



夏期公開講座

七月五日、六日
本館大会議室

テーマ「生活の中の植民地主義」

水野直樹

二〇〇二年の夏期講座では、春に終了した共同研究班「日本の植民地支配―朝鮮と台湾―」（班長・水野直樹）の班員による四本の講演が行なわれた。研究班の成果にもとづきながら、それとは若干異なる視点から植民地支配のあり方を考察しようとしたものである。日本が植民地として支配した朝鮮・台湾の社会生活の中に「植民地主義」がどのように埋め込まれて行ったか、そしてそれが植民地支配からの解放後も生活の中にいかに残ったか――日常生活に関わるいくつかの側

面を通してこの点を考えてみたい。

水野直樹（所員）「朝鮮人の名前と植民地支配」

韓国併合前後、日本は朝鮮支配を固めるために戸籍制度（当時は「民籍」と呼ばれた）を導入したが、それと同時に朝鮮人の名前を「一人一名」の原則に沿って「近代化」しようと図った。すべての住民に「姓十名」からなる名前をつけさせるという政策である。それまで戸籍上の名を持たなかった成人女性、姓がなかった奴婢身分出身者などにも、「姓名」をつけさせるとともに、幼名や改名の禁止、ハンゲルによる姓名の禁止、そして朝鮮語の固有語彙による名の制限などの措置がとられた。さらに、「日本人風の姓名」に改めたり、子どもに日本人名をつけたりすることを禁止したのである。

朝鮮人の名前に対する政策は、「近代化」を意図する一方で、名前に関わる朝鮮社会の慣習を植民地支配秩序の維持にとつて都合のいいものに変えようとする意図から決定され実施された。日本がもたらした名前に関わる規範は解放後も強く残ることになったが、近年ハンゲル名が復活するなど、「植民地主義」の遺産の克服も見られる。

鄭根植（韓国・全南大学、京都大学文学部外国人研究員）「植民地支配・身体規律・健康」

韓国のハンセン病患者の身体作法には、植民地時代のハンセン病療養所での厳しい身体規律の影響が強く見られる。軍事政権時代の学校にも、植民地時代に植えつけられた身体規律が生きていた。真の意味での民主化のためには、植民地時代から軍事政権の時代まで引継がれた身体に関わる規律のあり方を問い直さなければならぬ。

一九三〇年代後半に築かれた総動員体制の下で、日本当局は朝鮮人を人的資源（志願兵、徴兵、徴用）として動員するためにさまざまな形で朝鮮人の身体を規律しようとした。集団体操・ラジオ体操・「皇国臣民体操」、そして錬成を通じて、身体と精神の両面で総動員に適う人間を作り出そうとした。体力向上や健康も強調され、「健兵」「健民」「健児」、さらには「健母」などのスローガンが叫ばれた。短期間に徴兵を実施しなければならぬため、朝鮮では日本以上に「健兵」が強調されたといえる。こうして総動員体制下に強められた身体規律は、解放後の南北朝鮮の社会に長く残ることになった。

駒込武（京都大学教育学部）「植民地における神社

参拝」

日本人の生活の中では日常的なものとしてある神社参拝は、植民地においてはまったく異なった意味合いを持つものであった。それに対する拒否感と日本当局・在住日本人の対応などを考えるために、台南長老教中学における神社参拝問題を取り上げる。

イギリスの宣教師が建てたミッションスクールである台南中学は次第に台湾人の学校という色彩を強くしていくが、日本当局は正規の学校として認可していなかった。一九二〇年代後半以降認可を受けるために資金集めがなされたが、当局はその条件として神社参拝を強要した。在住日本人からは「非国民の学校」という非難が浴びせられ、学校関係者の間にも対立が生じることになった。そしてついに学校側は神社参拝を受け入れ、校長もイギリス人から日本人に替わることになった。皇民化教育の一部となるにいたったのである。この過程は、日本で「伝統」「日常儀礼」とされるものが植民地では暴力的な姿をとって現われたことを示している。

松田吉郎（兵庫教育大学）「台湾先住民と日本語教育―阿里山ツォウ族の戦前・戦後―」

日本が台湾を植民地として支配した時期に、台湾先

住民に対して行なった日本語教育がどのような意味を持っていたかを、台湾中央部に居住するツオウ族を例に考えてみたい。一九〇四年阿里山に「教育所」が設置され、巡査による日本語教育が始まり、一〇年代からは先住民に日本名がつけられるようになった。教育所で日本語を学んだ若者は、農業講習所などに進み、村落での中堅的な人物として養成されたが、彼らを組織してつくられた青年団や自助会が伝統社会において強い権限を持っていた頭目にとつて代わることになった。また、戦時中は日本語教育を受けた青年が「高砂義勇隊」として日本軍に動員された。

戦後、国民党による台湾支配に抵抗した二二八事件（一九四七年）に際しては、日本の教育を受けた先住民が運動に参加する一方、国民党によるきびしい弾圧をも受けることになった。日本によつて教えられた日本語は、先住民同士のコミュニケーションの手段となつたと同時に、先住民の近現代史に深い傷跡を残したことを忘れてはならない。

開所記念講演会

元代江南の禪宗と日本五山

——『勅修百丈清規』の成立と流伝——

古松 崇志

京都大学附属図書館には、十四世紀前半にモンゴル政権支配下の元代中国江南で編纂・刊行された禪宗清規（禪宗寺院における行事・儀式から禪僧たちの生活に至るまでを規定する規則集）『勅修百丈清規』の元刊本と五山版が所蔵されている。このうち元刊本は、宋代以来江南の出版中心地であつた福建建安において出版されたものである。版刻が美しいだけでなく、エディションとしても優れ、なおかつ他に所蔵を聞かない天下の孤本であることから、京都大学に所蔵される漢籍のなかでも屈指の優品といえる。

この『勅修百丈清規』が編纂された元代、モンゴル政権支配下にあつた江南の禪宗は、政権から冷遇もし

くは弾圧されたと従来みなされがちであった。しかし、モンゴル政権および政権関係者の援助によって江南仏教は全体に潤っており、禪宗もその例外ではなかった。

『勅修百丈清規』は書名に含まれる「勅修」から分かるように、一三三五年、時のモンゴル皇帝順帝トゴン・テムルの聖旨（口頭による命令）を奉じ、宋代以来の複数の清規を集大成するかたちで編纂されたものであった。そして、この聖旨によって江南で唯一通行可能な禪宗清規として認可され、以後広く用いられることとなった。『勅修百丈清規』の編纂を主導したのは、笑隠大訴と東陽徳輝という二人の禪僧であった。笑隠大訴は、クーデタで即位した文宗トク・テムルの即位記念事業として金陵（現南京）に創建された官宮寺院大龍翔集慶寺の開山住持であり、モンゴル政権および政権有力者との間に太いパイプを持っていた。笑隠はモンゴル政権の手厚い保護を受けるとともに、清規編纂と連動して、江南五山派寺院の住持選任を認める特許状をも与えられ、事実上江南禪宗の頂点に立つことになる。五山・十刹・甲刹という禪宗寺院独自の寺格の確立は、従来南宋時代に始まるとされてきたが、実際には以上のような元末の大龍翔集慶寺を中心とする集権的な教団制度の整備と深く関わるものと考えられる。元末における江南禪宗の教団化はそのまま明代

にも受け継がれていくことになる。

江南禪宗の集権化・教団化は、活況を呈していた日元交流を通じて、日本にも直接反映し、室町幕府成立後に政権と結びついた禪宗勢力が五山の寺院統轄機構を拡充していく動きにつながっていくものと考えられる。『勅修百丈清規』が元代江南から日本にいち早く伝えられ、五山版が盛んに出版されて日本で大流行したことは、まさしくこうした趨勢と軌を一にするものであった。

京大附属図書館に所蔵される『勅修百丈清規』元刊本・五山版は、南北朝・室町時代の日本の禪宗が中国の禪宗制度に範を採って学んだことを今に伝える証拠なのである。

（追記：本講演の詳しい内容については『古典学の現在』Ⅴ所収の拙稿を参照されたい。）

漢字コードの誕生

安岡孝一

漢字コードがパソコンやワープロの「字体」のためにある、という考えは、日本に広く蔓延している。これを端的に示すのが、国語審議会『表外漢字字体表』前文（二〇〇〇年一月）に記された以下の文章である。

情報機器に搭載される表外漢字の字体については、表外漢字字体表の趣旨が生かされることが望ましい。このことは、国内の文字コードや国際的な文字コードの問題と直接関わっており、将来的に文字コードの見直しがある場合、表外漢字字体表の主旨が生かせる形での改正が望まれる。

この考えは本当に正しいのだろうか。ここでは、漢字コードの誕生に遡って調べてみよう。

とはいえ、漢字コードの誕生というのが、これまた一筋縄ではいかない。ある人は、中国の電碼こそ最初の漢字コードだと主張するだろうし、日本という視点

だとCOI-59が最初という意見になるだろう。あるいは、規格としての漢字コードならJIS X 0208ということになるだろうし、いややはり国際規格としてのISO/IEC 10646こそ最初なのだ、という考え方もある。しかし、これら四種類の漢字コードのいずれを「最初の漢字コード」だとみなしたとしても、実はこれら四種類の漢字コードの間には、ある共通する考えが存在するのである。

中国の電碼は、一八七一年に大北電信が香港―上海で運用したのが最初であり、電報のための漢字コードである。COI-59は、北海道・中日・西日本・産経・中国の五新聞社と共同通信社が、一九五九年に作成した漢字コードであり、漢字テレタイプを共同運用するためのものである。すなわち、これらの漢字コードはいずれも、漢字をどのようにして通信するか、という点に主眼をおいたものであった。

一九七八年に制定されたJIS C 6226（現JIS X 0208）の目的は、西村恕彦「漢字のJIS」（標準化ジャーナル、一九七八年五月）に、はっきり記されている。

ある機械から次の機械へと情報を移してゆくことを、情報交換という。今回標準化されたのは、ある機械の出口から次の機械の入口までのあいだに

存在する漢字情報に用いる、漢字の字種とその符号である。機械の内部符号やその処理方式を規制するものではない。

一九九三年に制定された ISO/IEC 10646 (いわゆる Unicode) も、その主目的は情報交換である。漢字の「字体」に拘泥していないのは、中日韓の漢字統合という大それた手法からも明らかであろう。

これら四種類の漢字コードは、その誕生において、通信あるいは情報交換、すなわち漢字を「やりとり」するために作られたものであった。そこでは、漢字の「字体」はむしろ捨象されるべきものであり、漢字の「概念」それだけをコード化することが望まれる。つまり、パソコンやワープロは、そのような通信や情報交換のための漢字コードを借りているだけなのであって、漢字コードが「字体」を規定しているなどという考えは、全くの誤解に過ぎないといえる。

中原中也とランボー

宇佐美 齊

現在角川書店から刊行中の新編中原中也全集の第三巻(既刊)は、本文篇と解題篇の二部構成をとる。本文篇は、中原の残したすべての翻訳テキストを基にして、これに可能なかぎりの入念な校訂作業を加えて成立している。別冊の解題篇では、これらすべてにわたって翻訳の対象となった原典の確定とその解説、そして訳稿の制作過程を明らかにする詳細な考証がほどこされている。さらに当時の翻訳事情にかかわる書誌的な情報、中原訳との関連で重要と思われる同時代訳の掲出、数百ヶ所におよぶ語註、そして詳しい文献目録など、可能なかぎり読者の多様な関心に応えるべく周到な配慮がなされている。

本全集の編集委員のひとりとして、直接この巻の編纂に携わった経験を基にして、中原の多彩な訳業のうち、特にランボーを取り上げてその達成の意義を考えてみた。中原の翻訳はネルヴァル、ボードレール、ヴ

エルレーヌ、マラルメ、ラフォオルグ等、フランス近代詩の勤所を押さえたものと言える。なかでも中原がもつとも力を注いだ対象は、ランボーだった。三十歳で夭折した中原の晩年は、創作家としての仕事と平行してランボーの翻訳に捧げられた。昭和八年から十二年にいたる数年間に、実に三冊ものランボーの訳詩集を出版しているのである。すなわち昭和八年にラテン語詩を仏訳から重訳したのをかわきりに、昭和十一年に山本書店から『ランボオ詩抄』を、そして翌昭和十二年には野田書房から『ランボオ詩集』を公にしている。

ところで中原が残したもつとも優れたランボーの翻訳は、後期韻文詩（いわゆる「新しい韻文と唄」）の十八篇である。本講演ではこのうちの三篇、すなわち「恥」「最も高い塔の歌」「幸福」（いずれも中原訳の表題）をとりあげ、原詩との校合も交えつつ、詩の翻訳が提起する諸問題をその実際に即して考察してみた。

翻訳の良し悪しはどのようにして決められるのだろうか。誤訳や曲解の少ないものが多いことは明らかであるが、それなら翻訳者が通弁であればことは足りるかどうか、かならずしもそうとは言いい切れない。すぐれた日本語に移し替えられていなければ、そもそも鑑賞に耐えないからである。外国文学研究のあるべき姿と「翻訳文学」の存在意義という問題は、かつての吉

川幸次郎・大山定一論争いらいの悩ましいジレンマであるが、中原訳ランボーが提起する諸問題は、これに新たな光を投じてさらに考察を先へとすすめる糸口であると考える。

ヒンドウークシユ南北の考古学

桑山 正進

私の研究所生活二七年は、水野清一のアフガニスタン・パキスタン考古調査を展開して、ヒンドウークシユを跨ぐアジアの一地域の一千年紀に道筋をみつける作業過程であった。水野は、第二期考古調査（六三―六七）を、トハリスターの城邑、ガンダーラの佛寺の発掘に費やした。私はこのときから参加して発掘を担当したが、それが一段落すると、両地の中間であるヒンドウークシユ南麓カーピシー・カーブル地方を知る必要性を感じ出して、高さ二〇メートルの大遺跡タバ・スカンダルを縦割り発掘させてもらうことになった。当地方を土器で編年、トハラー、カーピシー、ガンダーラ三地方の比較検討から大山脈南北の歴史を

再構築してみたからである。だが、遺迹は独立丘上に二時期の層が乗っていただけで、土器編年の基準づくりには向かなかった。その地方で代替となるのは都市遺迹ベグラームしかなかった。ところが、ベグラームも詳しく報告を分析してみると、上層が六―七世紀、中層は一―二世紀、つまりスカンダルとまったく同時代平行の町であることがわかった。ということ、ヒンドウークシユ南麓には三―五世紀の遺迹は存在しないということになる。なぜだ。七九年暮のソ連軍侵攻は、この疑問を見つめるための室内作業には絶好の機会であった。中国来住の訳経僧、インドへの求法僧、その行路を検討しはじめた途端、いろんなことが水解した。まず論議の多い「罽賓」の同定。こと行歴僧についていえば、それはガンダーラであった。東西にのびるヒンドウークシユ山脈の東部に横断路、遠距離交易の道があつて、ガンダーラに通じ、交易の利がガンダーラ佛教を護持していた。しかし六世紀中葉に突然道は西に移ってしまう。原因は新興の突厥で、山脈の両側を支配していたエフタルを弱体化させ、五五八年にはヒンドウークシユ北麓を占拠したが、なんと不思議にも、北西インドに進出しない。留まったまま南麓のカーピシーと親和関係をもった。だから交易路はガンダーラを素通りした。西へ進んでかわつて

カーピシーを繁栄させ、山脈の中継地バーミヤーンを突如富裕化し、多数の大仏造営を可能にさせた。中央、南アジアを結ぶ交易路の、六世紀中葉におけるこのシーソーゲームは、南北両麓の社会や宗教に一期を画す。カーピシー一帯に三―五世紀の遺迹がないのは、遺迹の探査不足ではなく、上の歴史を確実に写しているからである。

一世紀以来六世紀まで、クシャーーンも、キダーラクシャーーンも、エフタルも、ヒンドウークシユを東脈で越えて北西インドへ進出した。北麓の遊牧族が北西インドを歴代牛耳ったのは、南麓まで出向いて積極的に交易の利益を確保せんとしたからである。それがガンダーラの佛教を支持した。中国佛教の形成はガンダーラなしにはありえない。

アルタイ西南麓に発した突厥の進撃は突発的であったが、エフタルを叩いてトハラ第一等の夏営地を占拠した。突厥はそこまで、山越えをしない。このような北麓に於ける突厥の動向は、大月氏、大夏、クシャーーンの関係を定めるために重要な示唆を与える。大月氏は敦煌辺から徐々に遠征してアム―流域に到達し、大夏を牛耳っている。大月氏も突厥とおなじく遠東から移動して北麓に牧地を確保した遊牧族である。古来遊牧族の慣習はかわらない。両者は北麓に留まると

も同じ動きをしたはずだ。北麓出身の遊牧族こそがインド進出を積極的ないし慣習的に行うとすれば、クシャーーンは大月氏の出ではないのである。この予測は、桑原隲藏・羽田亨の読みの正しさを補強する。

彙報

おくりもの

- 。井狩彌介教授は、鈴木学術財団特別賞を受賞（七月六日付）。
- 。宮 紀子助手は、日本中国学会賞を受賞（十月十二日付）。
- 。山室信一教授は、第十四回アジア・太平洋賞特別賞を受賞（十一月二日付）。
- 。菊地 暁助手は、重森弘淹写真評論賞を受賞（十一月二日付）。

訃報

- 。田中謙二名誉教授（八九歳）は、十一月十七日逝去。

人のうごき

- 。桑山正進（東方学研究所）教授は定年により退職（三月三十一日付）。
- 。木島史雄（東方学研究所）助手は辞任の上（三月三十一日付）、愛知大学現代中国学部助教授に就任。

。北垣徹（人文学研究所）助手は辞任の上（三月三十一日付）、西南学院大学文学部講師に就任。

。横山俊夫（人文学研究所）教授は大学院地球環境学堂教授に配置換（四月一日付）。

。濱田正美神戸大学文学部教授は、併任教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇三年三月三十一日）。

。中谷文美岡山大学文学部助教授は、併任助教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇三年三月三十一日）。

。浅原達郎（東方学研究所）助教授は当研究所（東方学研究所）教授に昇任（四月一日付）。

。森賀一恵（附属漢字情報研究センター）助手は富山大学人文学部助教授に昇任（十月一日付）。

。宮宅潔氏を助教授（東方学研究所）に採用（十月一日付）。

。佐野誠子氏を助手（東方学研究所）に採用（十月一日付）。

。藤原辰史氏を助手（人文学研究所）に採用（十一月一日付）。

海外での研究活動

。池田巧助教授（東方学研究所）は、文学部科学省科学研究費補助金により、二〇〇一年十二月二日大阪発、香港城市大学及び西南民族学院に於いてセッション語に関する資料収集・調査及び研究打合せを行い、一月六日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方学研究所）は、一月九日大阪発、国立シンガポール大学に於いて「孝—中国の伝統における孝の本質と実践」国際会議に出席・研究報告を行い、一月十三日帰国。

。山本有造教授（人文学研究所）は、文学部科学省科学研究費補助金により、一月十二日大阪発、南京農業大学、中国第二歴史档案館及び復旦大学に於いて戦前期中国農業統計データに関する資料調査・収集及び研究打合せを行い、一月二十日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、一月十日大阪発、キングスカレッジ（連

合王国)に於いてT E I外字問題委員会に出席、中華佛学研究所(台湾)に於いて第四回中華國際佛学会議に出席し、一月二一日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月二二日大阪発、中国国家図書館に於いて新旧キリスト教ミッシン出版活動の研究に関する資料収集を行い、一月二六日帰国。

。田中雅一助教授(人文学研究所)は、一月二四日大阪発、国立シンガポール大学に於いて宗教事情についての文献調査を行い、一月三一日帰国。

。藤井律之助手(東方学研究所)は、文部科学省在外研究員旅費により、一月二八日大阪発、大英図書館(連合王国)に於いて敦煌漢簡及び敦煌出土文字資料調査を行い、二月三日帰国。

。加藤和人助教授(人文学研究所)は、文部科学省科学技術振興調整費により、二月三日大阪発、カナダ保健省、ケベック州科学技術倫理委員会(カナダ)、インディアナ大学及び国家科学技術評議会(アメリカ合衆国)に於いて、生

命倫理に対する取り組みの現状調査を行い、二月十日帰国。

。真下裕之助手(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月四日大阪発、国立図書館(フランス)に於いて、「インド・イスラーム史に関するペルシャ語文献の諸写本の研究」に関する文献調査及び資料収集を行い、二月十六日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月十九日大阪発、台湾国家図書館に於いて敦煌写本調査を行い、二月二三日帰国。

。金文京教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月二十日大阪発、ソウル大学校及び高麗大学校図書館に於いて朝鮮版漢籍の調査を行い、二月二四日帰国。

。加藤和人助教授(人文学研究所)は、文部科学省科学技術振興調整費により、二月二十日大阪発、ナフィールド・カウンスル及び保健省(連合王国)、ドイツ科学技術倫理委員会に於いて生命倫理への取り組みに関する調査研究を

行い、三月一日帰国。

。藤井正人助教授(人文学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月二二日大阪発、ケーララ州パニヤール村近郊、トリヴァンドラム及びティルネルヴェリ市内(インド)に於いて、ヴェーダ伝承の現地調査を行い、三月十二日帰国。

。加藤和人助教授(人文学研究所)は、文部科学省科学技術振興調整費により、三月九日大阪発、オーストラリア国家保健医学カウンシル及びオーストラリア法制検討委員会に於いて生命倫理全般の取り組み及び生命倫理・医療倫理に関する規制等の現状に関する調査研究を行い、三月十三日帰国。

。井狩彌介教授(人文学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月二二日大阪発、イリンジヤラクダ市郊外、ティルチラパリ近郊及びタンジャプール近郊の伝承家系、トリヴァンドラム市・大学写本図書館、マドラス市内写本図書館(インド)に於いてヴェーダ現存伝承と写本の調査を行い、三月十五日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十二日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所に於いて俗曲文献調査を行い、三月十五日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究所）は、二月十六日大阪発、ジャーマ・マスジド、ニザームッデイン廟、タブリーギー・ジャマアト、デオバンド学院及びジャーマアテ・イスラーミー（インド）に於いて、海外における宗教事情の調査を行い、三月十六日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究所）は文部科学省科学研究費補助金により、三月九日成田発、ワシントンDCアメリカ人類学会事務局に於いて国際人類学民族会議打合せ、カリフォルニア大学バークレー校に於いて「日本」内なる境界を越えて」に関する国際シンポジウムに参加・発表を行い、三月十八日帰国。

。籠谷直人助教授（人文学研究所）は、文部科学省在外研究員旅費により、二〇〇一年九月二七日大阪発、ロンドン大学に於いて一九三〇年代の日英関係

史に関する研究を行い、三月二六日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月二三日大阪発、メルボルン大学、オーストラリア大学及びシドニー大学に於いて文化人類学関係の教育についての資料収集を行い、三月三一日帰国。

。村上衛助手（東方学研究所）は、三月十七日大阪発、故宫博物館（台湾）に於いて清代檔案の収集、シンガポール大学に於いて「市場、社会と国家の間での錯綜」国際研討会に出席、シンガポール国立古文書館に於いて植民地期華僑関係の史料収集を行い、四月九日帰国。

。石川禎浩助教授（東方学研究所）は、二〇〇一年九月二八日大阪発、アメリカ高等研究所に於いて近代日中関係史の調査・研究を行い、四月十日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月十三日大阪発、復旦大学に於いてヒトゲノム研究の倫理に関するパブリック・フォーラムに出席、上海国際会

議場に於いて国際ヒトゲノム機構年会に出席及び発表を行い、四月十八日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月一日大阪発、延世大学に於いて第一回韓国中語中文学国際学術発表会に出席、司会及び発表を行い、五月五日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月二八日大阪発、上海復旦大学に於いて国際シンポジウム「日本の戦後思潮と中日関係」に出席、第二樓案館（中華人民共和国）及び上海市図書館に於いて史料調査を行い、五月九日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究所）は、五月一日大阪発、ジャーマ・ミツリヤ・イスラーミヤ大学、デオバンド学院、デリー・ワクフ委員会及び中央ワクフ評議会（インド）に於いてワクフ法に関する情報収集、学院の施設のワクフ申請・承認の経緯及び州・中央政府との関係に関する調査、ワクフ法の制定・改訂の経緯及びワクフ申請・承認手続きとその実態に関する調査を

行い、五月十五日帰国。

。小南一郎教授（東方学研究部）は、五月二十七日大阪発、香港浸会大学に於いて、「唐代文学と宗教」シンポジウムに出席し、五月三十一日帰国。

。堂山英次郎助手（人文学研究部）は、五月二十八日大阪発、ライデン大学（オランダ）に於いて第三回国際ヴェーダ学ワークショップに出席及び資料収集を行い、六月五日帰国。

。藤井正人助教授（人文学研究部）は、五月二十九日大阪発、ライデン大学（オランダ）に於いて第三回国際ヴェーダ学ワークショップに出席及び研究打合せを行い、六月五日帰国。

。井狩彌介教授（人文学研究部）は、五月二十九日大阪発、ライデン大学（オランダ）に於いて第三回国際ヴェーダ学ワークショップに出席及び資料調査を行い、六月六日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、六月三日大阪発、北京外語学院に於いて講義・公開講演及び史料調査を行い、六月十日帰国。

。富谷至教授（東方学研究部）は、文部

科学省科学研究費補助金により、六月十日大阪発、ライデン大学（オランダ）ロンドン大学及びストックホルム大学に於いて「死刑の諸問題」に関する研究打合せを行い、六月二日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月十四日成田発、ミシガン大学及びワシントン大学に於いて国際人類学民族学会議の打合せ及び人類学者との情報交換を行い、六月二日帰国。

。田中祐理子助手（人文学研究部）は、六月十九日大阪発、ブリュネル大学（連合王国）に於いて国際シンポジウム「人々の健康と人類学」に出席及び研究打合せ、ロンドン大学図書館に於いて資料収集を行い、六月二日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、六月二三日大阪発、浙江大学（中華人民共和国）に於いて中韓人文科学術研討会に出席及び発表、上海図書館に於いて明代小説資料調査を行い、六月二日帰国。

。宮紀子助手（東方学研究部）は、文部

科学省科学研究費補助金により、六月三十日大阪発、国家図書館、故宮博物院及び中央研究院傅斯年圖書館（台湾）に於いて元刊本の調査及び元代漢籍の資料収集を行い、七月九日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、七月七日大阪発、シンガポール国立大学に於いて日本におけるモニユメントと記憶形成についての国際会議に出席及び報告を行い、七月十二日帰国。

。村上衛助手（東方学研究部）は、七月八日大阪発、中国第一歴史檔案館に於いて清代の檔案収集を行い、七月二五日帰国。

。宇佐美齊教授（人文学研究部）は、七月十五日大阪発、パリ第七大学及びギメ美術館（フランス）に於いて日仏文化交渉にかかわる研究打合せ及び関連資料調査を行い、七月二七日帰国。

。籠谷直人助教授（人文学研究部）は、七月十八日大阪発、ブエノスアイレス・ヒルトンホテルに於いて第十三回国際経済史学会に出席及び報告を行い、七月二日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、七

月二十日大阪発、中国国家図書館に於いて敦煌学研究史に関する打合せ及び資料収集を行い、七月二十九日帰国。

石川禎浩助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十四日大阪発、プリンストン大学、プリンストン高等研究所に於いて中国近代史に関する資料調査、ペンシルバニア大学に於いて中国革命史に関するワークショップに出席及び中国近代史に関する資料調査、国立公文書館及びジョージタウン大学（アメリカ合衆国）に於いて中国共産主義運動に関する資料調査、コロンビア大学に於いて国際共産主義運動史研究に関する研究打合せを行い、八月二日帰国。

山本有造教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月一日大阪発、中国農業部に於いてパック原資料調査及び中国第二檔案館における調査の為の事前打合せを行い、八月四日帰国。

ウィットレン、クリステイアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、七月十六日大阪発、中華佛学研究所及び

中央研究院（台湾）に於いて研究打合せ、テュービンゲン大学（ドイツ）に於いて ACH/ALLC 二〇〇二年度共同年会と TEI 文字問題 WG 会議に出席し、総合佛教学大辞典のドイツ語訳プロジェクトの打合せを行い、八月六日帰国。

曾布川寛教授（東方学研究部）は、七月十八日大阪発、中国四川省文物考古研究所及び四川省博物館に於いて南伝佛教美術の調査、上海博物館に於いて所蔵文物の調査を行い、八月十二日帰国。

中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月六日大阪発、海豊県誌弁公室（中華人民共和国）に於いてシヨオ語の調査及び資料収集を行い、八月二四日帰国。

森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、八月十八日大阪発、中国社会科学院近代史研究所に於いて中華民国史国際学術討論会に参加・学術講演及び研究打合せを行い、八月二四日

帰国。

安岡孝一助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二十日大阪発、台湾国家図書館に於いて古籍聯合目録資料庫合作建置研討会に出席及び新旧キリスト教出版活動に関する資料収集を行い、八月二五日帰国。

大浦康介助教授（人文学研究部）は、七月十四日大阪発、フランス国立図書館に於いて日仏文化交流の研究及び文学理論の研究のための資料収集を行い、八月二六日帰国。

富谷至教授（東方学研究部）は、委任経理金により、八月十八日大阪発、古浪長城、武威博物館、酒泉博物館、丁家閭、敦煌莫高窟、敦煌博物館等（中華人民共和国）に於いて漢代長城・古墓調査及び漢代烽燧遺址調査、甘肅省考古研究所（中華人民共和国）に於いて漢代木簡調査を行い、八月二八日帰国。

古勝隆一助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十八日大阪発、古浪長城、武威博物

館、酒泉博物館、丁家閘、敦煌莫高窟、敦煌博物館等（中華人民共和国）に於いて漢代長城・古墓調査及び漢代烽燧遺址調査、甘肅省考古研究所（中華人民共和国）に於いて漢代木簡調査を行い、八月二十八日帰国。

。藤井律之助手（東方学研究所）は、八月十八日大阪発、古浪長城、武威博物館、酒泉博物館、丁家閘、敦煌莫高窟、敦煌博物館等（中華人民共和国）に於いて漢代長城・古墓調査及び漢代烽燧遺址調査、甘肅省考古研究所（中華人民共和国）に於いて漢代木簡調査を行い、八月二十八日帰国。

。東郷俊宏助手（東方学研究所）は、八月十九日大阪発、上海交通大学に於いて第十回国際東アジア科学・技術・医学史学会に出席、北京中医研究院に於いてチベット医学史関連図書翻訳の打合せを行い、八月二十九日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、八月二十日大阪発、台湾国家図書館に於いて古籍聯合目録資料庫合作建置研討会に出席及び新旧キ

リスト教出版活動に関する資料収集を行い、北京理工大学に於いて敦煌学學術史国際研討会に出席、中国国家図書館に於いて南欧所蔵中国学資料にかかわる調査研究を行い、八月二十九日帰国。

。大原嘉豊助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二日大阪発、中国歴史博物館及び故宮博物院に於いて中国仏教美術資料調査、岩山寺、崇福寺、仏光寺、南禪寺、大雲院及び開化寺（中華人民共和国）に於いて寺観壁画調査、鞏鼎石窟及び龍門石窟（中華人民共和国）に於いて石窟彫刻調査を行い、九月三日帰国。

。稲葉稜助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二十日大阪発、国立東洋学研究所（ウズベキスタン）に於いて収蔵資料調査及び収集、イチヤン・カラ博物館及びサマルカンド大学（ウズベキスタン）に於いて初期イスラーム時代遺物・遺跡の調査、タシケントに於いて資料調査及び収集を行い、九月十日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月二日大阪発、ホテル・オムニ（カナダ）に於いて国際ヒトゲノム機構・倫理委員会、第三回国際DNAサンプリング会議に出席、ゲノム研究の歴史と社会の相互作用に関する調査研究を行い、九月十日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二日大阪発、山西大学（中華人民共和国）に於いて中国北方民族建立的王朝与中国文学的發展国際研討会に参加・論文発表、北京図書館に於いて元代文学関係資料調査を行い、九月十四日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月七日大阪発、Berlin-Brandenburg Academy of Sciences（ドイツ）に於いて学会に出席及び新旧キリスト教の東アジアにおける出版活動に関する調査を行い、澳門中央図書館に於いて第三次中文文献資源共建共享合作会議に出席及び資料収

集を行い、九月十九日帰国。

。森時彦教授（東方学研究所）は、委任経理金（一部先方負担）により、九月十日大阪発、南開大学（中華人民共和国）に於いて学術講演、天津、新河県及び青島に於いて綿業調査研究を行い、九月二三日帰国。

。坂本優一郎助手（人文学研究所）は、九月十三日大阪発、ロンドン大学及びイングランド銀行に於いて十八世紀のマーチャント・バンカー関係史料の研究及び調査を行い、九月二九日帰国。

。籠谷直人助教授（人文学研究所）は、九月二八日大阪発、自治行政部政府記録保存所（大韓民国）に於いて韓国財界に関する調査を行い、九月三十日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月二七日大阪発、九州全南大学（大韓民国）に於いて「東アジアにおける法と近代性」国際学術大会に参加及び研究発表、大田政府記録保存所（大韓民国）に於いて朝鮮における植民地支配の制度・機構・政策

に関する資料収集を行い、十月二日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二九日大阪発、大田政府記録保存所（大韓民国）に於いて朝鮮古蹟調査史料の調査を行い、十月二日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究所）は、九月二八日大阪発、マドラス大学及びボンベイ大学に於いてインドの宗教事情についての調査を行い、十月十一日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究所）は、十月十一日大阪発、清平豊林コンド（大韓民国）に於いて批判と連帯のための東アジア歴史フォーラムに参加及び報告、江華島（大韓民国）に於いて植民地民族運動史蹟調査を行い、十月十五日帰国。

。ウィツテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、十月十日大阪発、ニューベリー図書館（アメリカ合衆国）に於いてTEICコンソーシアム年会に出席し、十月十六日帰国。

。富谷至教授（東方学研究所）は、十月十二日名古屋発、西北大学（中華人民共和国）に於いて西北大学百周年記念式典に参加及び学術講演を行い、十月十六日帰国。

。田中祐理子助手（人文学研究所）は、文部科学省科学技術振興調整費により、十月十三日大阪発、マニラダイアモンドホテルに於いて「アジアにおける生命倫理の対話と普及」マニラ会議に出席し、十月十六日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学技術振興調整費により、十月十三日大阪発、マニラダイアモンドホテルに於いて「アジアにおける生命倫理の対話と普及」マニラ会議に出席し、十月十七日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究所）は、十月十五日大阪発、漢学研究センター（台湾）に於いて地方文献学術研究会に出席及び報告、台湾国家図書館に於いて資料調査を行い、十月二一日帰国。

。井狩彌介教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十月二三日大阪発、デ

リー大学に於いて日印会議に参加及びインド文学に関する研究打合せ、ケララ州中南部及びサンスクリット高等研究所（インド）に於いてヴェータ伝承の研究調査を行い、十一月十六日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十一月十四日大阪発、北京大学古代史研究中心に於いて「古代中外関係…新史料の調査、整理與研究」国際学術研討会に出席し、十一月十七日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月二十日成田発、ハイヤートホテル（アメリカ合衆国）に於いて、二〇〇二年アメリカ人類学会年次大会に出席及び発表を行い、スミソニアン博物館に於いて米国の文化人類学教育に関する資料収集を行い、十一月三十日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月二七日大阪発、北京大学及び雲

南石窟（中華人民共和国）に於いて雲南石窟調査打合せ及び調査を行い、十二月五日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月一日大阪発、ローマ国立中央図書館及びラウレンツィアーナ図書館（イタリア）に於いて南欧所在中国学資料に関する研究資料調査を行い、十二月八日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究所）は、十二月五日大阪発、ソウル大学韓国文化研究所及びソウル大学図書館に於いて植民地支配政策に関する講演及び旧京城帝国大学期の蔵書についての資料調査を行い、十二月九日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学技術振興調整費により、十二月八日大阪発、ソウル・マリオットホテルに於いて「アジアにおける生命倫理の対話と普及」ソウルワークショップに出席し、十二月十一日帰国。

。ウィットテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、十二月八日大阪発、チュラコン大学（タ

イ）に於いて国際仏教学学会総会に出席し、十二月十四日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、十二月八日大阪発、成均館大学大東文化学院（大韓民国）に於いて招待連続講演及び資料収集を行い、十二月十六日帰国。

。佐野誠子助手（東方学研究所）は、十二月十一日大阪発、高麗大学及びソウル図書館に於いて「中国文化與東亞細亞文化」国際学術大会に出席及び韓国所蔵漢籍調査を行い、十二月十六日帰国。

。宇佐美文理助教授（東方学研究所）は、十二月十五日大阪発、国史編纂委員会（大韓民国）に於いて東アジア史料研究編纂機関国際学術会議に出席し、十二月十九日帰国。

。宇佐美齊教授（人文学研究所）は、十二月十四日大阪発、パリ第七大学東アジア言語文化研究科に於いて国家博士号審査委員会に委員として参加し、十二月二十日帰国。

。大原嘉豊助手（東方学研究所）は、十二月十七日大阪発、上海博物館に於いて

て中国美術史料調査を行い、十二月二十日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、十二月十四日大阪発、中央研究院歴史語言研究所（台湾）に於いてデジタル・ライブラリに関する意見交換及び学術講演を行い、十二月二十三日帰国。

。曾布川寛教授（東方学研究所）は、委任経理金により、十二月十八日大阪発、上海博物館及び河姆渡遺跡管理所に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、十二月二十四日帰国。

。東郷俊宏助手（東方学研究所）は、十二月十七日大阪発、ハーバード大学イェンチェン図書館に於いて中国医学史関連図書文献の調査、ハーバード大学サイエンスセンター科学史部門に於いて「東アジアにおける伝統医学の近代化」に関する国際会議に出席・発表を行い、十二月二十七日帰国。

。村上衛助手（東方学研究所）は、十二月十七日大阪発、廈門大学及び福建師範大学（中華人民共和国）に於いて中国福建省南部に関する文献・史料収集を行い、十二月二十七日帰国。

外国人研究員

。張翔 復旦大学人文学院教授
近代国家形成における日中の思想交流

（文化連関研究客員部門）
受入教官 山室教授
期間 一月五日～四月四日

。Jan VanBremen ライデン大学ジャパン・ 코리아研究センター講師
公的な記憶の物象化についての人類学的研究
（文化生成研究客員部門）
受入教官 田中助教

期間 二月一日～七月三十一日
。Brij Mohan Tankha デリー大学講師
近代日本の地域主義
（文化連関研究客員部門）
受入教官 山室教授

期間 四月十五日～七月十四日
。張廣達 北京大学中国古代史研究中心教授
唐代中外交通史の研究
（文化生成研究客員部門）
受入教官 高田教授

期間 八月十五日～

二〇〇三年二月十四日

招聘外国人学者

。Peter Francis Kornicki ケンブリック大学教授
十七世紀日本の読書の研究
受入教官 横山教授

期間 一月五日～四月十日
。Giovanni Verardi ナポリ東洋大学アジア学部教授
アフガニスタン仏教石窟資料の調査と研究
受入教官 桑山教授

期間 三月二日～三月三十一日
。San Tun ヤンゴン大学講師
西田哲学における仏教理解の研究
受入教官 麥谷教授

期間 五月七日～二〇〇三年四月六日
。李曉 中国上海芸術研究所研究員（教授）
明代戯曲の研究
受入教官 金教授

期間 五月十二日～
二〇〇三年三月十一日

。鄭 阿財 国立中正大学中国文学系教授

唐五代佛教傳布通俗化之研究

受入教官 高田教授

期間 七月十日～七月二十九日

。朱 鳳玉 国立嘉義大学中国文学系
敦煌「雜字」系篆書與歷代「雜字」書
之比較研究

受入教官 高田教授

期間 七月十日～七月二十九日

。蔡 榮婷 国立中正大学中国文学系副
教授

祖堂集中禪宗詩偈研究

受入教官 高田教授

期間 七月十日～七月二十九日

。Choi Kyeong Hee シカゴ大学東ア
ジア言語・文化学部助教授
近代朝鮮文学史と檢閲問題に関する研
究

受入教官 水野教授

期間 七月十二日～八月十一日

。吳 春宜 国立高雄第一科学技術大学
助教授
日米防衛協力の指針と台湾海峡有事と
の関わりについて

受入教官 山室教授

期間 九月一日～

二〇〇三年二月二十八日

。徐 庭雲 中央民族大学歴史系教授

中国古代理女史

期間 九月十三日～

二〇〇三年二月十四日

。J. Ma リンピン大学助教授
数学理論の歴史的変遷に関する研究

受入教官 武田教授

期間 十一月二十九日～十二月二十六日

外国人共同研究者

。徐 碩培 カリフォルニア大学ロサン

ゼルス校歴史学部博士課程

戦時期朝鮮における朝鮮知識人の植民
地文化認識

研究

受入教官 水野教授

期間 四月一日～

二〇〇三年三月三十一日

。陳 金華 カナダブリティッシュコロ
ンビア大学助教授

中国中世における舍利信仰、法藏伝の
研究

受入教官 船山助教授

期間 七月一日～八月二七日

。阿 風 中国社会科学院歴史研究所副
研究員

中国明清時代における法律・裁判文書
の研究

研究

受入教官 岩井教授

期間 八月二七日～十一月二十四日

。金 美賢 成均館大学校 B K 21 儒教文
化圏研究団研究助教

植民地朝鮮における女性労働力政策

受入教官 水野教授

期間 九月十日～二〇〇三年九月九日

外国人研究生

。吳 芙蓉

羯南の対外論 ―日清戦争前後の時期
を中心に

研究

受入教官 山室教授

期間 四月一日～九月三十日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇二年度漢籍担当職員講習会（初
級）

第一日（十月七日）

漢籍について

名古屋大学文学研究科教授

井上進

漢籍目録の構造―漢籍整理の基礎

宇佐美文理

目録検索とデータベース検索

安岡孝一

漢籍目録を読む(経部)

井波陵一

第二日(十月八日)

カードの取り方―漢籍整理の実践

梶浦晋

漢籍目録を読む(史部)

井波陵一

漢籍目録カード作成実習

第三日(十月九日)

コンピュータと漢籍

ウィツテルン、クリステイアン

漢籍データベースについて

安岡孝一

漢籍目録を読む(子部)

井波陵一

漢籍データ入力実習(一)

第四日(十月十日)

工具書について

漢籍目録を読む(集部)

井波陵一

漢籍データ入力実習(二)

第五日(十月十一日)

NACSIS-CATと漢籍データベース

国立情報学研究所教授 宮澤 彰

実習解説

梶浦 晋

。二〇〇二年度漢籍担当職員講習会(中級)

級)

第一日(十一月十一日)

中国目録学史(一)

時代情況と出版傾向

文学研究科教授

叢書―漢籍分類の特色

平田昌司

安岡孝一

分類上の問題点(経部)

梶浦 晋

第二日(十一月十二日)

中国目録学史(二)

中国の地方志について

文学研究科助教授

分類上の問題点(史部)

古勝隆一

漢籍データ入力実習(一)

第三日(十一月十三日)

中国目録学史(三)

和刻本漢籍について

鹿児島大学法文学部教授

高津 孝

分類上の問題点(子部)

井波陵一

漢籍データ入力実習(二)

第四日(十一月十四日)

『東洋学文献類目』について

守岡知彦

村田康彦

分類上の問題点(集部)

井波陵一

漢籍データ入力実習(三)

第五日(十一月十五日)

現代中国書について

石川禎浩

実習解説

梶浦 晋

お客さま

二月四日 北京大学中国古史研究中心

副主任 李 孝聡（高田、森、安岡が応接した）

二月六日 南開大学経済学院人工与発展研究所労働経済研究室主任 沈 士

倉他一名（森、村上が応接した）

三月七日 中国第一歴史檔案館・満文部研究館員主任 吳 元豊（岩井が応接した）

三月二六日 台湾《国家數位典藏計畫》

中央研究院歴史語言研究所 陳 光祖他四名（高田、井波、ウィッテルン、古勝、森賀が応接した）

三月二九日 香港中文大学教授 金 觀

涛、劉 青峰、台湾暨南国際大学教授 周 昌龍、台湾中央研究院近代

史研究所研究員 張 寿安（森、金、井波、ウィッテルンが応接した）

五月九日 ハーバード大学東アジア研究センター客員研究員 孔 祥吉（狭間、森、岩井、石川、村上が応接した）

七月十五日 蘇州大学社会科学学院院长

王 衛平（岩井が応接した）

八月一日 シンガポール国立大学代表团（阪上、田中（雅）が応接した）

九月二九日 山東社会科学学院訪日代表团（森、石川、村上が応接した）

十月三十日 ハルトトゥム大学アジア・アフリカ研究所教授 Yusuf Faal Hasan（阪上、田中（雅）、稲葉が

応接した）

十一月十九日 華中師範大学歴史文化学院院长 朱 英、武漢大学経済与社

会史研究所所長 陳 鋒（森、岩井、村上が応接した）

十一月二二日 南京大学公共管理学院社会学系主任 周 曉虹（森、石川、村上が応接した）

十二月三日 清華大学人文学院経済学研究所副教授 龍 登高（森、村上が

応接した）

よみがえった《縄文記号》

―須田剋太の二点の絵画―

高 階 絵里加

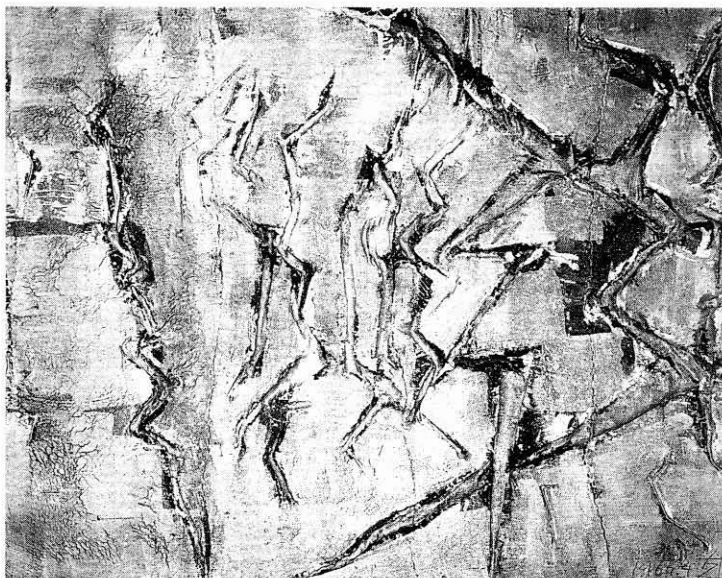
人文研本館には、洋画家の須田剋太（一九〇九―一九九〇年）の手になる二点の絵画が所蔵されている。いずれも《縄文記号》と題された一五〇号と一二〇号大の力強い抽象絵画である。

大きい方の作品は銀灰色を基調に白、濃紺、黒を加え、小さい方はやや黄味がかった灰色と白が基調の画面であるが、いずれも稲妻か山脈のような大小何本ものジグザグ形が画面を走っている。ドンゴロス（穀物の輸送用袋）と思われる目の粗い麻布を開き不規則につなげてカンヴァスとして用い、ジグザグ線の部分は盛り上がっているが、裏をみると凹部分に細く丸めた新聞紙を芯として詰め、麻糸で固定している。それぞれ向かって右下に年記とサインが刻まれており、大きいサイズの作品は「一九六五・四 剋」、小さいサイズの作品は「一九六五 剋」となっている。裏の木枠

には、制作年月日とともに、画家の名前、住所、電話番号が書きつけられている。

二点の油彩画が人文研の所蔵となったのは、一九七五年のことであった。人文研会計掛所蔵の寄付受入書類によれば、当時、人文研の本館新宮にともない移転を完了し、現在国際学術交流の場として内外の研究・学生・著名な学者が多く来所しているが、新築の建物は鉄筋コンクリート打ち放しのため寂寞感が残り、来所者をあたたかく迎えるためにも、環境面の整備充実を考えていたところ、須田画伯より絵画二点の寄付申し込みがあり、研究所で検討した結果、須田剋太画伯の人格、画風ともすばらしく当研究所の建物に合っており、寄付を受け入れることになった、という。

このように、縁あって人文研の所有となった二点の《縄文記号》は、奇贈を受けて以来、二階大会議室廊下側の壁面と二階談話室の東側壁面に四半世紀以上ものあいだ掛けられていた。そのため、年月と環境による劣化が激しく、全体に早急に洗浄と修復が必要とされる状態だった。そこで二〇〇二年二月より約三カ月間をかけて修復作業が行われ、五月一七日に、あらたに大会議室内正面の左右の壁面に取り付けられた。取り付け場所変更については、壁の大きさや日照や空調



といった基本的条件を満たし、なおかつ二点をひとつのセットとして鑑賞でき、また一般の方々にも機会があれば見ていただけるようにと考えて、この場所に決定した。

『週刊朝日』連載の司馬遼太郎「街道をゆく」の挿絵を、一九七一年から約二〇年間手がけたことでも知られている須田剋太は、一九〇九年に現在の埼玉県北足立郡吹上町に生まれ、独学で洋画を学び、文展、日展で多くの賞を受賞。堅実な具象的画風でその評価を確立するが、一九四九年より突如として抽象的画風へと転向、以後国画会会員となり前衛の道を進む。この急激な転換は、東洋思想と近代造形を結合する前衛表現をめざし活動していた抽象画家、長谷川三郎との出会いがきっかけであった。この時期、須田が急激に抽象に向かった背景として、当時の関西における活発な美術界の活動がある。すでに四〇年代初頭に須田は奈良に居を移し、当時東大寺観音院住職であった上司海雲を通じて多くの関西の文化人と知り合うことになるが、京都では戦後まもない時期に、京大美学教授であった井島勉教授を中心とする学者や作家たちの集まり「転石会」が発足して、月一回京都で定例の研究会を行っており、須田が一九四九年に疎開中の長谷川と知り合ったのは、この「転石会」の席上であった。ちな

みにこの「転石会」のメンバーには、桑原武夫、井上靖、やはり人文研にその代表作『発掘』が所蔵されている須田国太郎も加わっており、須田の人文研とのかかわりも、このような京都の文化人サークルの中で培われたものであったことが推測される。

さらに、五〇年代の前衛書を巡る動きも、須田に大きな影響を与えた。書の美学的考察にも優れ『墨美』や『書の美』に執筆していた井島、そして禅と書の精神を抽象表現に取り入れる試みを行っていた長谷川との交流から、須田も一九五〇年には『書の美』に、最初の書に関する文章である「原始と書」を発表した。

『書の美』は前衛書家森田子龍の主催であったが、森田はこのほか五〇年代初頭から『墨人』『墨美』などの書芸術総合雑誌を意欲的に編集した。これら雑誌上での線の造形美をめぐる議論は、欧米の抽象絵画に多大な影響を与え、ここに前衛書とアクション・ペインティングやアンフォルメルをつながりが強く意識されるようになる。「原始と書」のなかで「私の頭の中には、シュール、アブストラクト、書（古代文字）、無、禅、子供の絵、原始芸術でいっばいだ」と語った須田にとっても、精神と身体の運動そのものでもある自発的な線の問題は、つねに最重要課題であった。

須田による晩年の詩のひとつに「記号と意味」とい

うものがある。

「花」とか「女」とかいう字は
意味を持っています。

それが私の書の中では記号になります。
造形のはたらきを通してそうなるのです。

縄文土器の文様――

あれは縄文人の記号です。

意味を持った記号です。

縄文人が

その末裔である私に

呼びかけてくる記号であるとともに、

それをうけた私自身のなかに

新しい記号が生まれました。

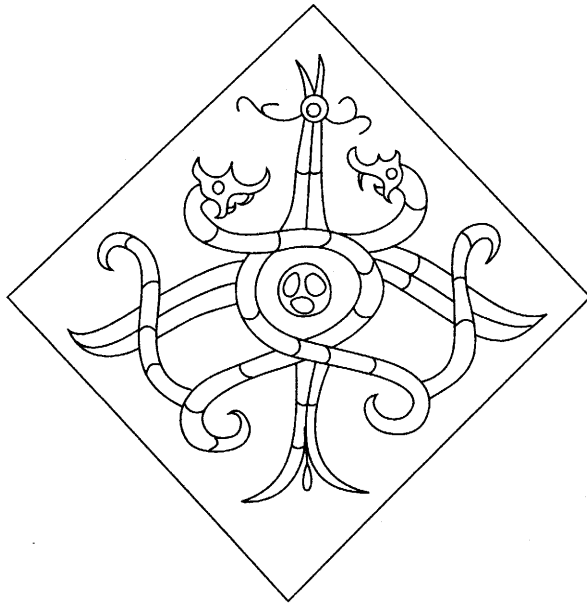
その本と末との両方を含めて私は

「縄文記号」と呼んでいます。

近年のジャポニスム研究でも明らかにされているように、「線の美」を日本美術の一つのアイデンティティとみなし、そこに原始や子供のエネルギーに通じるような生命感を見出す西欧の視線は、すでに一九世紀後半に準備されていた。日本の戦後美術がこのような視線をどの程度いわば「逆輸入」しているかは単純

には語れない問題だが、仮に原始のジグザグ線が呪術的な目的のために描かれ、いっぽう線を紙に引くという生理的快感から子供が画用紙にジグザグ線を引くのだとすれば、須田の線は明らかに素材や物質そのものが芸術であることの意味を問い掛けている。ここからわれわれは、二〇世紀美術最大の問題である「イメー
ジとオブジェ」の関係について、もう一度考え直すことができるであろう。

本修復と本稿は、修復にあたって頂いた(株)和蘭画房をはじめとする多くの方々への御協力なしには実現し得なかった。とくに飯沼二郎京都大学名誉教授、中西幸子氏(前京大文研図書室)、山領まり氏(山領絵画修復工房)、林洋子氏(京都造形芸術大学助教授)、平井章一氏(兵庫県立美術館)には、この場を借り、記して心よりの感謝を申し述べたい。



無秩序の秩序

岩井茂樹

先日、「中国近世社会の秩序形成」研究班、報告者の伍躍さんは、このところ清代の捐納制度と財政のかわりについて研究を深めている。捐納による候補官の増大などにより、吏部がおこなってきた任官システムが清末にはほとんど崩壊するにいたったという趣旨、いつもながら精緻な仕事ぶりに感心させられた。報告に先だち伍躍さん曰く、この研究班のテーマは「秩序形成」だけれども、今日の話は「秩序の崩壊」、班長の意図するテーマの方向とは反対かも知れない、と。班長応えて、金銭や権力による横紙破り、あるいは制度の自己崩壊の行き着く先は一見すると無秩序のようだが、人びとがこのような行動に向かうのは、公式の秩序の裏がわで、別の秩序がはたらいっていることを見て取ったからだともいえるだろうし、人びとが行動を選択するさいの利害判断が集的にそのような別の秩序を形成するのだともいえるだろう、と。

中国の制度を研究していると、礼制と義理にねざす

典章の世界が整然と組み立てられていることが、まず印象的である。いく世代にもわたる儒家者流の士大夫官僚は、現実との格闘のなかでこのような制度をつくりあげてきた。現実にすり寄るよりは、あくまでも理念や理想をたかく掲げる、これがかれらの主義であった。典章の秩序は凜然として美しい。しかし、この高みこそが同時に弱点でもあった。その弱点を補うために、小さな逸脱からむき出しの暴力まで動員する別の秩序が必要とされた。この別の秩序は不可欠の存在であるにもかかわらず、典章の秩序はこれを内側にとりこむことには消極的である。典章が義理や礼制にもとづく一貫した正統性に固執すれば、これら別の秩序は制度の外側に放任されざるをえない。ただ、この二つの秩序は矛盾しながらも、全体としては国家や社会のシステムをうまく機能させていた。こうした秩序のありかたを、現実と制度の動的な相互作用のなかに窺う、これがこの共同研究の目的であった。三年間の成果如何？ 班員各位の格闘ぶりを、きたるべき報告論文のなかに見いだしていただけるであろう。

目から鱗をとる

岡田 暁 生

共同研究班「文明と言語」には、その前身「安定社会と言語」から引き続き、約一年半前より参加させてもらっている。土曜午後に催されるこの研究会への出席は、私にとって週末の楽しみであると同時に、毎回ちよつとした緊張を伴う経験だ。「緊張を伴う」というのも、この研究会の暗黙の（そしてほとんど唯一の）約束事が、「どんな話題でも必ず質問を最低一つする」ということだから。おまけに毎回「発表ネタ」が恐ろしく多岐にわたる。生態学、江戸文学、私小説論、生命科学、からくり人形等々。僕の専門は西洋音楽史なので、「芸術」や「西洋」が絡む話題は何とかついていけるし、昆虫採集と熱帯魚繁殖の趣味にはまつていることもあつて、科学（とりわけ生き物）がらみの話題も普通の人文系の人間よりは慣れているつもりだが、それでも「毎回質問最低一つ」というノルマはきつい。自分の頭の中にあることすべてを総動員するようなプレッシャーがかかる。

だが、自分の発表に対してはいつも「目から鱗」としか言いようのないような刺激的な意見を他分野から頂いているので、こちらだけだんまりを決め込むわけにもいかない。例えば私が十九世紀のピアノ音楽について話したときには、ヨーロッパの自動人形のことや十九世紀の生物学の教科書のことなど、とてもではないが「学会」というタコソボの中には絶対にかかることのない情報を色々教えていただいた。予想だにできなかったが、言われてみれば自分が知りたいことと完璧に「嵌る」、そういう情報を得られる場所というのはそうあるものではない。

最近よく思うのだが、「どんな発表をするか」ではなく、「どんな質問をするか」こそ、研究者としての自分の「見識」を試される最大の試金石である気がする。そもそも発表を聞いて何も「Q」が浮かばないというのは、相手の言った内容を「すべて理解した（傲慢）」か、「何も理解できなかった（無知）」か、「自分とは無関係と思った（無関心）」か、いずれかのはずなのだ（実はこれは、私が本務校の学生に常日頃口やかましく言っていることなだけれど）。実際、この研究会に参加するようになってから実感するのだが、「人間のすること」で互いに無関係な事柄は何一つない。人間に関わるすべてのことは、どこかで「文明」

と「言語」につながっているはずなのだ。しかるに、私が専門にする音楽とはきわめて抽象的な芸術であり、「純粹法則」のようなものを追及するという点で、その研究は数学に似たところがある。そして「世間（世界）から隔絶していること」をもって学問的純正の証とする錯覚に陥りやすい。私にとって「文明と言語」研究会は、塔に籠っているとわずらいがちな近視眼の矯正に格好のフォーラムⅡ広場である。

「国家形成の比較研究」

前川 和也

かつてわたしは、ふたつのタイプの比較史について書いた（『古代メソポタミアと古典古代 比較史へのひとつの試み』樺山紘一編『歴史学』一九七七）。共通の基盤をもつ文化世界のなかでの複数の歴史社会を対比して、類似点と差異点とを浮かび上がらせてみるのが第一タイプの比較史であり、いっぽう第二タイプ

とは、共通性が見出せるかどうか分らない複数の歴史社会で、とりあえず比較を行なってみることなのである。すでにマルク・ブロックが同じ主旨の論文を公刊していたことなど知らずに、わたしはこの文章を書いた。そこでわたしは、「地中海農耕文化」世界でのふたつの古代都市国家の成立と展開を理念的な枠組みを用いて説明したのだが、同時に、第二タイプの比較論は、どこまで有効なのだろうかと書き添えていたのである。

第二タイプの比較論が実りをもたらす要件は、かなり限られているだろう。おおくの人々によって類似、あるいは同一だと判定され、そしてしばしば単一タームで定義される社会制度が時空を超えて存在するとき、その社会制度をめぐる比較作業がはじめて可能になる。二〇〇一年四月にわたしたちがはじめた共同研究「国家形成の比較研究」は、第二タイプの比較研究だ。かつてこの地球で「国家」と総括できる社会組織が各地に生まれた。しかもそれが形成されていくプロセスにも、ある程度の規則性を見出せるからである。じつさい、すでにわれわれは、さまざまの国家形成モデルをもっている。

これらのモデルは、いったいどこまで有効なのだろうか。最近の膨大な研究蓄積は、かつての諸モデルを

無意味にしてしまったのだろうか。それとも、やはり時空を超えた国家形成論はあまり有効ではなく、たとえば、地中海農耕文化、東アジア世界、オセアニア、アンデスといった「共通の文化基盤」空間のなかでの国家形成の過程を問うほどの意味を見出せないというのだろうか。正直に言って、あと二年のちに研究グループがどのような地平に到達できるのか、わたしたち自身、まだよく分ってはいない。

けれども、わたしたちが「国家形成」という大研究目標を掲げたことの背景は単純で、はっきりしている。わたしたちは、日頃は考古学、歴史学、古典文献学などの専門家であり、そのメチエに誇りをもっている。けれど同時に、とめどなく増えていく資料に、わたしたちは毎日悲鳴をあげつつ対応しているのだ。このままでは、いつか資料の山に押しつぶされる。定期的に集まって、専門作業の前提としてわたしたちが掲げている究極の研究目的（国家はどのようにして生まれたのか）をおおらかに論議する以外に、この問題に対処する方途は、なかなか、みつかりはしないだろう。

研究会がはじまって、弥生や古墳期の専門家たちが、膨大な量の情報と、既存の、あるいは新しい国家形成モデルとのあいだを自由闊達に往復するさまを見ることができた。これは、楽しいことであった。

「元代の社会と文化」班

金 文 京

森 田 憲 司

高 橋 繁 樹

本研究班は、『事林廣記』班と元曲班に分かれていますので、お二人の班員の方に各々の班について書いていただいた。（金 文京）

『事林広記』班

『事林広記』が載せるのは、天文宇宙からはじまって、行政区画、官制、世界地理、音楽、年中行事、弓術、酒に料理、手紙の書き方、俗語、モンゴル語、日常エチケット、占い……と、雅俗取り混ぜ、はなはだ多岐にわたる。こんな書物を、一人ではしからはしまで読みつづけるのはつらい。そもそも「使う」ための本だから、当時も読みとおした人はいなかっただろう。自分の研究に必要な箇所を使うだけなら簡単だが、全

体を読みこなすには、いろいろな分野の専門家の力を借りることが必要だ。しかも、現存が確認できる版本だけでも一二種あって、刊行は二百年以上にまたがる。成立はさらに百年近くはさかのぼるだろう。内容も時代に応じて少しずつ違っていて、諸本をつきあわせるたびに、何かしらの発見がある。営利出版の本だから、本文をいじくって行を節約したり、行末で終るように字数を調節して、内容が詰まっているように見せたりと、書肆のあざとさの痕跡を見つけることができるのも面白い。ただし、一人では作業に目が行き届かないテキストの電子検索が進んで、各項目のネタ本捜しの環境も整ってきた。『事林広記』は、なにせ研究に人手が必要な書物だ。「人文の研究班向き」の文献だと思ふ。所外の者が言うのもなんだが、少しでも多くの方のご助力を、お願いしたい。(森田憲司)

元曲班

この集まりが「研究班」となつてすでに三年が経つた。こないいかたをするのは、実は相当以前から元曲の元刊本研究をテーマに定期的な研究会を続けてきたからで、もともとは昨年亡くなられた田中謙二先生のお宅で、一九七九年春から定期的に始まった私的研究会に由来している。それが今日までおよそ四半世紀

も続いており、こんなに長く続くとは、実際、我々の誰が予想しただろうか。初めはメンバーの赴任地の関係で年一回しか開けなかったが、後にみんな関西地区に集まったため毎月開くようになり、今の研究班となった。作品は中国俗語文學、とくに演劇や口語小説の研究にとつて、成立前夜の貴重なデータが豊富で、当時の人々や社会のさまざまな様態が読み取れ、興味が尽きない。誤字脱字だらけで、まるですぐ捨てられそうなパンフレットのような粗悪な印刷物が表出する世界は、苦勞も多いが、研究していて楽しくてしかたない。個人では到底解決しえない難解な問題も、共同研究であればこそ、ほかでは得られない画期的な意見や見解に遭遇し、毎回わくわくしながら参加している。全作品三十種、全部研究し終えるまであと何年かかるのだろうか。(高橋繁樹)

赴任前後の雑談雑感

宮宅 潔

神戸の女子大でしばらく教壇に立った後、人文研に移ってきた。神戸で暮らした月日は決して長くはなかつたけれども、須磨・垂水の海を自宅から、大学から、通勤の電車から毎日眺め、いかなごの昼網を待つ行列に春を教えられ、夏の昼下がりにはほんやりと海岸を散歩し、漁港周辺を根城とする野良猫たちの写真を撮ってまわった、海辺での日々が懐かしい。

懐かしいといえば、そこらじゅうをうろろしていた学生達に当然のごとく人文研では出会わなくなつた。神戸に赴任した当初は、約束もなく押しかけてきて長時間居座っていく学生達に正直辟易したものだつたが、学生の要望や悩みなど、他の手段では聞き得ない様々な本音が雑談のなかからは伝わってくる。雑談も重要なサービスの一環、つまりはこれも仕事だと思つておしゃべりにつき合っているうちに、いつの間にかそれが生活の一部となつてしまつたらしく、以前よりは格段に広くなつた今の研究室にひとり静かに座っていると、なにやら落ち着かないような、寂しいような気分

が湧いてくることもあつた。しょうがないなあと雑談につき合っていたのは、もしかしたら学生達の方だったのか。

雑談の中味はいずれも他愛のないものばかりだったが、なにげない学生のひとことにどきりとさせられることもあつた。たとえば私が人文研に転任する予定だと知れ渡つたころ、「先生、じゃあ奥さんが生活費を稼ぐの？」という得体のしれない質問が飛んできた。なぜそんな疑問が浮かんだのかまつたく見当がつかなかったのも、その場では答えることすらしなかつたが、どうやら「宮宅は京大に戻る」のだと聞いて、学生に戻つて一から勉強し直すのだと勘違いし、生活費はどうするのだろうかと彼女なりに心配してくれたらしい。大きなお世話だと言うほかないが、考えてみるとひたすら史料と向き合つて過ごす日々は、学生のころのそれと違わないといえれば違わない。もちろんそれに加えて成果を集約し広く発信する大きな義務が課せられ、学生とは較べものにならない立場なのであるが。とはいえ、むきになつて力んでも仕方がない。ご親切な学生の心配を、一学徒としての初心を忘れるなというエールだと理解して、とりあえずは有り難く噛みしめておきたい。

「マカロニ・バブル」

坂本 優一郎

あれはたしか、小学校三・四年頃だったと記憶している。ある日、クラスメイトが見たこともない摩訶不思議な代物を教室にもつてきた。物珍しさも手伝つて、休み時間には彼女のまわりに黒山の人だかりができた。彼女曰く、これは「マカロニ」であると。「マカロニ」といえば、あの土管のようなかたちのはず」と、たまに給食に出てくるそれを思い浮かべる、その他大勢。だが、彼女が誇らしげに見せるそれは、貝や魚、蛸やニンジンと、じつに楽しいかたちをしていた。「マカロニ」土管」という「常識」に支配されていたわれわれは、驚愕した。

ここで、子どもであれば、すなおに「欲しい」と思うだろう。じつさい、そうだった。でも、彼女もさるもの、無条件では応じない。物々交換である。「マカロニ」ひとつと鉛筆一本といったように。たちまち、教室に「マカロニ」が流通しはじめた。彼女以外にも、「マカロニ」を家から持ち込んだ者もいたようだが、そこは子どものこと。無尽蔵に持ち込む、というわけ

にはいかなかった。ともあれ、教室にはかなりの「マカロニ」が出回った。出回るにつれて、変化も起きた。はじめは「マカロニ」そのものを求めて交換がおこなわれていたが、しだいに「マカロニ」は目的ではなくなり、交換の媒介を果たすようになっていったのだ。

ところがである。「マカロニ」を貯めこんでいた男の子が、いつものように「マカロニ」で物差しを手に入れようとしたところ、なんと、拒否された。いくら「マカロニ」を積まれても、物差しを持ち主はまったく応じない。嫌だ。理由はただ、それだけである。しかし、この小さな事件をきっかけに、状況は一変した。皆、夢から覚めたように、いつせいに「マカロニ」との交換を拒否しはじめた。「マカロニ恐慌」である。「マカロニ」の『交換価値』は未来永劫」と思いこんでいた男の子の手元には、「価値」を喪失した手垢まみれの「マカロニ」が、行き場もなく大量に残された。「マカロニ」主義ならぬ資本主義とはしよせん、かくもはかない「信用」にもとづく脆弱なものにすぎない。「金」であろうが「国家」であろうが、たとえ「マカロニ」の信用がほかの何かによって裏打ちされたとしても、本質は変わらない。「物差し所有者」の「嫌だ」のひとつことで、これらは無に帰す可能性をつねに秘めている。ある日どこかで「信用の共有」が失

われるや否や、蟻の一穴よろしく、カタストロフは突然、やってくるかもしれない。

日本語と鼻音

堂 山 英次郎

日本語の「ン」を口の中のどの辺りで発音しているか（調音位置）を意識する人は少ないと思う。「ン」は息を鼻から出して発音する鼻音であるが、語のどの部分に現れるかによって、その調音位置は様々である。大雑把に言うと、語中では次にくる音と同じ位置で発音されることが多い——関白「カンバク」の「ン」は「ㄱ」、干拓「カンタク」なら「ㄱ」、感覚「カンカク」なら「ㄱ」という具合に。一方で語末の「ン」は多くの場合、口蓋垂（のどびこ）近くに舌の奥を軽く当てて発音する。——「ホン、パン、ヤカン」。「ン」はまた、外来語の語末鼻音「ㄱ」の表記としても用いられる。しかし、英語を含む多くの欧米諸言語では、語末の「ㄱ」も、舌を上歯（或いは歯ぐき）に付けないと発音し

たことにならない。よって例えば、英語の「again」と、日本語として発音した「アゲイン」とでは、鼻音は全く異なる位置で発音される。バイエルン・Mのゴールキーパー「オリヴァー・カーン」も「カーンヌ」ぐらいに発音しないと正確に通じない。日本語式発音だと、欧米人には鼻にかかった「カゝ」のように聞こえることだろう。

先に「カンカク」の「ン」を「ㄱ」と表記した。この音は東日本ではガ行の子音としても使われる。いわゆる「ガ行鼻濁音」だ。長くNHKや音楽の世界では規範的な発音とされてきたが、東京でも消滅しつつあると言われて久しい。この音を持つ話者はガ行を、語頭では「ga gi」、語中では「ga gi」と発音する——「カガミ、タマゴ、クギ」。さてこの「鼻濁音」は英語にもある。sing, longなどの語末の-ŋもこの音だ。日本語では、この種の単語は普通「ング」と表記されるが、英語の発音は「ㄱ」ではなく、あくまで「ㄱ」一音である。「カーンヌ」の「ヌ」の様に、調音位置を開放する時に「ング」と聞こえるだけだ。後ろに母音が続く場合も——行為者名詞 singer [siŋgə] や分詞 singing [siŋgɪŋ]、そしてもちろん文中でも——「ㄱ」だけで発音するので、この場合「ガ行鼻濁音」と同じ様な音になる（カレン・カーペンターの歌う「ㄱ」は奇麗だ——♪

long ago [ɔ:ŋ-əɡəʊ])。ただし、形容詞の比較・最上級 (longer, longest) の場合には、[j]ではなく [ŋj]と発音される [ɔ:ŋge, ɔ:ŋgɪst]。

通常、外来語には自国語の中でもっとも響きの近い音を当てて発音・表記する。日本語は「E」(二以外のナ行)も「J」(ガ行鼻濁音)も持っているが、語末では殆ど単独で使われないため、一番響きの近い「ン、ング」で代用する。しかし、代用の発音がもとの外国語の発音にまで影響すると厄介だ。語末の鼻音一つでも正しく発音できないと、言葉が相手に全く伝わらないこともある。外国語を学ぶ時、単語や綴りを覚える前にやっておくべき基礎作業があると、つくづく思う。

相互乗り入れの魅力

守岡知彦

私は鉄道が好きである。とはいえ、この所には私などよりもはるかに「鉄」な方が何人かいらっしやるようであるから、こんなことをいうのはおこがましいの

ではあるが。それはさておき、鉄道ファンにも路線派、写真派、時刻表派、車両派、模型派などいろいろタイプがあると思うのだが、多分、私はどっちかという車両派であろうと思う。しかし、それとは別に「相互乗り入れ」も好きである。

相互乗り入れというのは、異なる鉄道会社(組織)の境界を越えて列車が行き来することである。私が毎日乗っている近鉄京都線と京都市営地下鉄烏丸線もその一例である。ちなみに、「相互」ではない例もあると思うので、単に「乗り入れ」と書くことにしよう。

どうして乗り入れが好きなんだろうかと考えてみると、多分、境界を越えるのが面白いらうということに思い当たる。例えば、小田急から箱根登山鉄道への乗り入れは軌間の幅さえ違っていて面白い。大学院生の頃、よく利用した「はくたか」の場合、北陸本線からの北越急行はくはく線に分岐する所もわくわくするし、このほくほく線自体が狭軌新幹線ともいえるべき高速鉄道でありながらローカル鉄道でもあるという二面性を持っていてミスマッチが面白い。時折見える立派な田んぼも奇麗である。

乗り入れとは異なるが、大学生の頃に乗ったシベリヤ鉄道の場合、アジアとヨーロッパが連続的に変化していくのが面白かった。一応、アジアとヨーロッパの

境というのが決められているらしくオベリスクが立っているのだが、車窓からは見えるのは一瞬である。

思うに私は境界というか、複数の世界がつながる姿が好きなのだ。考えてみれば、今情熱をかたむけている漢字もまた形と音と義の3つの世界が織りなす相互作用の世界であるし、Langという計算機言語（今この文章を書くのに使っているXEmacsというシステムでも使われている）が好きな理由も記号の世界と対象物の世界の関連を自在に操ることができるからかも知れない。

私はずっと「意味」というものがなんなのかが気になつてしょうがなく、いろんなことに足を突っ込んで来たような気がするが、おそらく「意味」は複数のモノの相互作用によって生じるのだと思う。つまり、「意味」は世界の境界に宿るのだと思うのだ。もしかすると、私にとつて乗り入れはそれを象徴しているように感じられるのかも知れない。

ひつくりかえつた葡萄棚の謎

宮 紀子

鬢は鴉の濡れ羽色、頬はあかねの霞色、花嫁御寮の付き添いにあたら甘んじてはいるものの、なりは押しも押されぬ若奥様、かの『西廂記』の紅娘に勝るとも劣りやせぬ、にこやかな応対に、教養溢れる受け答え、まっこと「解語の花」のごと、もし俺様がこの娘得られたならば、葡萄棚ひつくりかえずことになるう

これは、一四世紀の大元大モンゴル国時代、文人や楽人によつて盛んに作られた散曲のひとつで、【中呂】朝天子のメロディにのせて歌われた。作詞者は、最も有名な雑劇作家の関漢卿とも、『中原音韻』の著者周徳清ともいわれている。最後の一句「倒了葡萄架」は、清朝の『長生殿』という芝居の、玄宗と梅妃のもとに楊貴妃がのりこむ場面にも類似の台詞があり、どうも奥さんが焼きもちをやいてド派手な夫婦喧嘩になることらしい。にしても、なぜ葡萄棚なのか、数年来の謎だった。ところが、その解答は、意外にも二〇〇一年の二月「モンゴルが遺した『翻訳』言語——日本『老乞大』の発見によせて」と題する、散曲に無関係な研

究発表の準備中に得た。朝鮮王朝の官僚李辺が翻訳機関のために著わした『訓世評話』（蓬左文庫蔵）の一節で、漢文の本文とそれを敷衍した口語漢語の訳が記される。

昔々、徐神翁と申すお役人、いつも妻を怖がって、およそ女色に關することだと、四方山話にもよう出さぬ。のちに、知県に除せられて、妻ともども任地に赴いた。ある日、このお役人、役所で公務の裁きをつけていると、傍に書吏がやってきて文書に署名する。知県がひよいと見れば、書吏の顔には引つ掻き傷、書吏に『そなた、誰と喧嘩してかような傷を負ったのじゃ、もしや、かみさんにやられたか』と問えば、書吏は跪き『どうして然様なことがございましょう、昨夜は月が美しゅうございましたゆえ、裏庭の葡萄棚の下で月見をいたしておりますと、折悪しく突風が棚をなぎ倒し、葡萄の棘で引つ掻き傷をこさえたのでござりまする』という。知県は書吏を威嚇して『この与太者が、でたらめを申すでない！』ただちに書吏の妻をひつたてて、お白州に打ち据えて『やい、この醜女！おなごの癖に物の解らぬ奴じゃ、大凡おなごたるもの、従順を以て貴ぶもの、夫は妻の天なるぞ、なんで亭主いびつて、そのつらに傷を負わせてよいものか』と怒鳴りつければ、書吏の妻、慌てふためき、みんな妾が嫉妬

ゆえと一部始終を陳述し、そこで知県はすべて知り、即刻判決言い渡し杖刑執行の折りもおり、知県の妻がこの裁き聞きつけたからさあ大変、いきなりかわらけ手にとって知県めがけて放り投げ、キーキー喚いて出てまいり、文机をガラガラドシャンと蹴倒した。知県は驚いたの何のつて、すぐさま書吏に申すには、『そちたち二人はしばし退りおれ、うちの葡萄棚もひっくりかえるぞ！』県の住人たちは皆この話をきいて、笑うこと止め処がなかった。

ちなみにこの笑い話、本家本元の中国の同時代文献には、管見の限り残っていない。モンゴル時代の研究に朝鮮資料が欠かせぬ所以である。

懸泉随想

藤井律之

平成十四年の八月、漢代西北辺境遺址の調査のため、研究班の人達と中国の甘肅省を訪れ、安西から西に向かつて敦煌に行く途中、懸泉置という漢代の駅伝施設

の遺跡に立ち寄った。二万余の簡牘が出土したこの遺跡の調査は十年前に終了しており、遺跡自体は完全に埋め戻されていたし、発掘をされた何雙全・柴生芳の両氏が「ちよつと掘ったところで何も出やしないよ」という表情をしていたので、私を含めた十人ほどは、すぐ近くの山上にある烽火台を見に行くことになった。日頃の運動不足がたたってすぐに息切れしてしまったが、烽火台からの景色は格別であった。ただ、別行動を取る我々に団長が与えた時間は三十分、それを若干超過して戻ってきた頃には車は砂煙を立てて走り去っていた。流石に秋霜はなかったが、文字通り烈日のもと、団長の時間厳守ぶりを思い知らされ、山登りの疲労もあってその場にへたり込んでしまった。

しかし、行く先の予測はついていた。車が道路の方ではなく、懸泉置より更に奥に向かっていたからである。程なくして車が戻り、我々を運んでくれた先は、懸泉置という名称の由来である、懸泉であった。『元和郡県志』によると、大宛遠征の帰途、貳師將軍こと李広利が渴きに苦しむ三軍を救うべく岩肌を刺したところ湧き出てきたという泉である。現在でも付近の住民に恩恵を与えているようで、真夏のゴビの中とは信じられない水の冷たさと辺りの緑によって、先程の疲労は十二分に癒されたのであった。

その後、さらに西へと歩を進め、様々な知見を得たが、日本に帰ってきてふと思い当たったことがある。

漢代、懸泉置の数キロ北を東西に流れる疏勒河を天然の防壁として使っていたらしい。李広利の大宛遠征と懸泉置の設置時期の前後は不明だが、少なくとも現在のゴビからは想像もできないほど水は豊富であったろう。さらに、最初に大宛攻略に失敗したとき李広利は帰還を許されず敦煌に留まっていたし、二度目の攻略の際には、敦煌までの補給路は確立していたのである。帰途に懸泉附近を通ったとたしても、恐らく李広利は渴きに苦しむことなどなく悠々と引き上げてきたに違いないのである。

前述の懸泉にまつわる伝承には、魏晋以後に懸泉置が放棄されたことと、それと前後する周囲の乾燥化が背景にあったことは想像がつく。しかしながら、懸泉が、およそ英雄とは言い難い李広利と関連づけられた理由に関しては依然として謎のままである。

（人文科学研究奨励賞）

伝承と再創造

後藤 静夫

現在文楽と呼ばれている人形浄瑠璃は義太夫節浄瑠璃の演奏によって三人遣いの人形で演じられる伝統的な演劇である。

浄瑠璃は「語り物」の一種であり「語り」は「欺り」に通ずると言われる。

語り物は「平曲」を直接の淵源とし戦記物語を語ることが多かったが、聴衆を惹きつけるためには臨場感を醸し出さねばならない。それが「欺り」に通ずる表現となったのであろうか。

ともあれ浄瑠璃はレパトリーを戦記物から神仏の靈験譚・お伽草紙等に広げる一方、太夫（語り手）と楽器奏者（琵琶↓三味線）を分離することで表現力を豊かにして民衆の支持を拡大していった。

貞享元（一六八四）年、竹本義太夫が現れるに及んでその優れた表現力・音楽性で他の浄瑠璃を席巻した。専属作者に近松門左衛門を迎え文学的にも第1級のものとなった。それ以来三〇〇年間表現技巧・技術を練

磨した結果義太夫節の表現力は極限まで高められる一方、数ある邦楽中でも最も修得が困難なものとなった。特に太夫はまず自らの肉体を楽器化するところから始めて想像を絶するような厳しく長い訓練が必要である。「義太夫節らしい声が出るようになった」と言われるだけで十年程かかる。

その稽古も独特である。若い太夫と三味線が始めての役（作品）を舞台に掛けるとき、先人達の録音テープ等を参考にして自分達だけで稽古をして舞台上がつてしまうことは「勝手稽古」といい厳に戒められる。師匠・先輩でその役の経験者の指導を受けなければ稽古をしたことにならない、といわれる。生身の演奏は経験した者にしかわからない、楽譜（義太夫節にも楽譜がある）では表わせない誠に微妙な間・息使い・発声等の技巧・技術がある。それをマンツーマンで口伝によって体に叩き込んでいくのが稽古である。

さらに独特なのが「二〇年、三〇年先の稽古」である。師匠は弟子に「今は自分の言っていることがわからないだろうが二〇年、三〇年経ったらわかるから、肝に銘じて覚えておけ」という。事実大幹部級の演者がしじみと「昔師匠に言われたことが今度の舞台上でやっと納得がいった」ともらす場面に何度か立ち会ったことがある。

流祖竹本義太夫の教えに「口伝は師匠にあり、稽古は花鳥風月にあり」がある。この場合師匠は自分の経験や先人の教えを口伝として伝えるに過ぎない、本当の稽古（本質の把握）は弟子が自らの努力で世の森羅万象にあたって会得すべきものである、と言うことであらう。その意味で古典とは不断の「再創造」であると云えよう。

文楽ではプロ同士の稽古は一切金のやり取りはない。自分が師匠・先輩に稽古してもらって現在があるのだから、後輩の稽古をするのは自分の義務であり、師匠・先輩に対する恩返しである、との意識が文楽の芸の伝承を根底で支えているのである。

（国立文楽劇場）

書いたもの一覧

(氏名五十音順) ●は単行本)

池田 巧

- 香港における繁体字の標準字形 ことばと社会 六号 三月
- デイリー日中英・中日英辞典(監修) 三省堂 六月
- 花旗は桑港の中華体験 ニッセイ経営情報 Vol. 365 十月

石川 禎 浩

- 中国近代史 原田敬一・水野直樹編『歴史教科書の可能性』青木書店 二月
- Chinese Marxism in the Early 20th Century and Japan *Sino-Japanese Studies* vol.14 四月

- 「華人與狗不得入内」告示牌問題考 『第三屆國際漢學會論文集』中央研究院近代史研究所 八月
- 辛亥革命時期的種族主義與中国人類學的興起 中国史学会編『辛亥革命與二十世紀的中国』中央文献出版社 八月
- 在閉幕式上の發言 中国史学会編『辛亥革命與二十世紀的中国』中央文献出版社 八月

- The Chinese National Revolution and the Eighth ECCI Plenum: Exploring the Role of the Chinese Delegate "Chugunov", in: M. Leutner et al. (eds.), *Chinese Revolution in the 1920s: Between Triumph and Disaster*, London: RoutledgeCurzon 九月

- 対談・「創立史」から「成立史」へ(緒形康氏と)

- 二十世紀初頭の中国における「黄帝」「熱」「排満」肖像・西方起源説 『二十世紀研究』三号 十二月

稲葉 穰

- 初期イスラーム時代におけるインドへの道——アフガン高地からインダス流域へ——、桑山正進編『石窟寺院の成立と変容』(平成十一—十三年度科学研究費補助金研究成果報告書) 三月

井波 陵 一

- 『石刻が語る三国時代』(監修) 京都大学人文科学研究所 十一月

岩井茂 樹

- 東アジアの近世(世界史) 『知恵蔵2002』朝日新聞社 一月
- 北京：都市と環境(講演録) 『人文』第四九号 三月
- 明代「嘉靖四十一年賦役黃冊」の語るもの(講演録) 『人文』第四九号 三月
- 《嘉靖四十一年浙江嚴州府遂安縣十八都下一圖賦役黃冊殘本》的發現與初步考析 地方文獻學術研討會報告論文、漢學研

究中心(臺北)、一〇月
会説・電子テキスト・XML

『漢字と情報』No. 5 一〇月

ウィットネン・クリスチャン

Style and Fashion in Early Song Chan Yulu, in: Facets of Tibetan Religious Tradition and Contacts with Neighboring Cultural Areas, edited by Alfredo Cadonna and Ester Bianchi, Venice 2002, p. 127-151. 三月

Chinese Buddhist texts for the new Millennium — The Chinese Buddhist Electronic Text Association (CBETA) and its Digital Tripiṭaka, in: Journal of Digital information, volume 3 issue 2, <http://jodi.ees.soton.ac.uk/Articles/v03/i02/Wittem/> 九月

宇佐美 齊

作家の恋文(1)〜(2) 小原流 挿花 一月〜十二月

「アヴァンギャルドの世紀」を問う 讀賣新聞 三月

立原道造と杉浦明平の往復書簡を読む 企画展図録『立原道造と杉浦明平』 立原道造記念館 三月

「音のかげら」によせて 企画展図録『はがねの変相——金沢健一の仕事』 川崎市岡本太郎美術館 三月

シンポジウム「中原中也とランボー、ヴェルレーヌ」(佐々木幹郎、鈴木和成、山田兼士とともに) 中原中也研究第七号 九月

翻訳・イヴ・マリ・アリュー著「中原中也は山羊か羊か——『山羊の歌』という詩集名について——」

日常から一瞬へ——清岡卓行著「一瞬」を読む—— 現代詩手帖 十一月

新資料「蛙ノート」雑感 立原道造記念館報第二四号 十二月

宇佐美 文理 『テキスト二種』 漢字と情報 No. 4 三月

『雑家類小考』 『中国思想史研究』第二十五号 十二月

大浦 康介 写生文と小説のあいだ——漱石『草枕』『虞美人草』『坑夫』

北岡誠司・三野博司編『小説のナラトロジー——主題と変奏』 世界思想社 十二月

漱石作品のナラトロジー——写生文の概念をめぐって(転載) 『国文学年次別論文集』平成十二年度版

学術文獻刊行会/朋文出版 十二月

岡村 秀典 農業社会与文明的形成 華夏考古 第一期 一月

●中国沿海岸における龍山時代の地域間交流(編著) 科研(基盤研究C) 成果報告書 三月

●文家屯 一九四二年遼東先史遺跡発掘調査報告書(編著)

中国古代における墓の動物供犠
真陽社 三月

東方学報 京都第七四冊 三月
景初三年銘三角縁神獸鏡の画像と系譜 『神原神社古墳』
加茂町教育委員会 三月

書評 甲元真之著『中国新石器時代の生業と文化』
古代文化 第五四卷第三号 三月

三星堆文化的譜系 西江清高編『扶桑与若木』
巴蜀書社 四月

位至三公鏡／王莽鏡／海獸葡萄鏡／鍵／鏃／画像鏡／鈔／魏
晉鏡／夔鳳鏡／虺龍鏡／金印紫綬／銀印青綬／釘／釘拔
楔／鎖／管／工具／黃幢／高麗鏡／後漢鏡／湖州鏡／獸帶
鏡／神獸鏡／隋唐鏡／星雲鏡／生口／青大勾珠／前漢鏡
／戰國鏡／草葉文鏡／鑿／蝶番／槌／鐵鏡／内行花文鏡／鋸
／鑿／白珠／鉢／班布／倭錦・異文雜錦／盤龍鏡／鋌／方
格規矩四神鏡／銘帶鏡／木附短弓・矢／鈔／六朝鏡

『日本考古学事典』三省堂 五月

座談会 都市の起源② 都市の王権と宇宙論

建築雑誌 一一七卷一四八八号 五月
考古学からみた漢と倭 白石太一郎編『日本の時代史』
第一卷 吉川弘文館 六月

解説1 岡崎敬『シルクロードと朝鮮の考古学』
第一書房 六月

中国からみた森尾古墳の方格規矩四神鏡 『とよおか文化財
リーフレット』二 豊岡市教育委員会 八月

解説 岡崎敬『古代中国の考古学』 第一書房 十一月
The Place of Erh-li-tou Culture in the Formation of the
State
Transactions of the International
Conference of Eastern Studies No. XLVII 十一月

落合弘樹
秩禄処分と華族 歴史読本 第四七卷五号 五月

加藤和人
ヒトクローン胚と幹細胞研究 『世界』岩波書店 三月
同右(韓国語訳) 『Emerge』新千年社 五月
書評 スティーブン・ジェイ・グールド著『ダ・ヴィンチの
二枚貝』 『日経サイエンス』日経サイエンス社 七月
生命倫理と「ゲノムひろば」 『パリティ』丸善 十一月
科学的発見・発明と知的所有権 (名和小太郎・佐倉統氏と
鼎談)

『NHKスペシャル 変革の世紀I 市民・組織・英知』
NHK出版 十一月

The Language of Present-day Biology and Biomedicine —
Globalized Science meets Cultural Diversities.
(YOKOYAMA Toshio and KIM Yung Sik ed.)
人文科学研究共同研究資料叢刊 第七号 十二月
クローン——規制と議論を進める契機に

『私の視点』朝日新聞 十二月二五日

『私の視点』朝日新聞 十二月二五日

菊地 暁

二股大根論序説 『人文』四九 三月
書評・篠原徹編『近代日本の自画像と他者像』 『史林』八五／三 五月

金 文京

春香伝と水戸黄門 月刊韓国文化 二月

●老乞大(共著) 東洋文庫 平凡社 二月

東アジア漢字文化圏の訓読——中韓の加點資料 二月

老乞大——高麗時代の中国語教科書 月刊韓国文化 三月

東アジアにおける太子受難説話と王権神話 人文学報 第八六号 三月

事林廣記刑法類・公理類訳注(共著) 東方学報 第七四冊 三月

日本龍谷大学所蔵元・郭居敬撰『百香詩選』等四種百詠詩簡考 日本漢学研究初探 台湾大学 三月

兪越的文芸観 晚明與晚清・歴史伝承與文化創新 湖北教育出版社 三月

●三国志演義の栄光 四季節出版社(ソウル) 六月

木の下の石碑 京大広報 五七〇 七月

The Literature of Tun-huang ACTA ASIATICA 82

THE TOHO GAKKAI 七月

南戲中の婚変故事和南宋状元文化 中華戯曲 第二七号 七月

明代萬曆年間の山人の活動 東洋史研究 六一卷二号 京大

東洋史学会 九月

晚明小説類書作家登志護生平初探 明代小説面面觀

学林出版社 九月

書評・和の学問・学問の輪 関西大学文学部中国文学科編

『文化事象としての中国』

関西大学出版部 中国図書 内山書店 十月

龍谷大学所蔵元・郭居敬撰『百香詩選』等四種百詠詩について 日本漢学研究初探 勉誠社 十月

童婉争奇與晚明両性文化 明清文学與性別研究 十月

三国志演義を読む 鈴木陽一編『中国の英雄豪傑を読む』 江蘇古籍出版社 十月

書評・日中学术交流の架け橋 蔡毅編『日本における中国伝

統文化』 勉誠社 東方 第二六二号 東方書店 十二月

仇討ちの芝居——日本と中国国立劇場十二月歌舞伎公演『彦

山権現誓助剣』パンフレット 十二月

現代の言葉——女性天皇・雪舟と栄西 京都新聞夕刊

小牧 幸代

アーガー・ハーン三世、アシュラーフ、アフレ・ハディー

ス・ウラマー連合、アフレ・ハディース派、イードガー、

ウルス、カースト、サッジャード・ナシーン、シャッター

リー教団、ジャマーアト・ハーナ、スフラワルディー教団、

聖者・ワールドにおける聖者Ⅱ現代の聖者②、足跡信仰、

ダルガー、チシュテイー教団、デーオバンド派、ナクシユバンデー教団(南アジア)、ニザームッデイン・アウリヤー、バハーウッデイン・ザカリヤー、パレルヴイー派、ユナーニー医学 大塚和夫他編

岩波イスラーム辞典 岩波書店 二月
イスラーム神秘主義(インド)、カッワーリー

日本イスラーム協会他監修 新イスラーム事典 平凡社 三月
インド・イスラーム世界の聖遺物信仰…「遺されたもの」信仰の人類学的研究に向けて
人文學報 第八七号 京都大学人文科学研究所 十二月

小林 博行

テクストとしての農本主義——橘孝三郎『日本愛国革新主義』を読む 上野成利編『二〇世紀前半における「危機」と「脱」近代』をめぐる諸言説に関する総合的研究』(科研報告書) 三月

スペインサー・ヴァイスマン論争 阪上孝編『進化論』受容の社会的・文化的文脈にかんする学際的・比較研究』(科研報告書) 三月

聞きなしと鳥語

京都新聞 十月三十日

小南 一郎

T'ang-Dynasty Ch'uan-ch'i Stories: From the Narrative Locus to the Written Work, ACTA ASIATICA (Bulletin of the Institute of Eastern Culture) 82 二月

唐代伝奇小説——語りの場から作品へ

中国古典小説研究 7号 三月

『十王経』の形成と隋唐時代の民衆信仰

東方学報(京都) 七四冊 三月

天命・生命・運命——中国古代の命の觀念をめぐる

平成十三年度 足利学校釋奠記念講演筆記 三月

遠遊——時間と空間的旅行

中央研究院中国文哲研究所『空間、地域與文化』 十二月

阪上 孝

●フランス革命期の公教育論

岩波文庫 一月

シンポジウム「東方学と国際協力」開会の辞『廿一世紀の東方学』 人文科学研究所 三月

シンポジウム「東方学の再構築」開会の辞『廿一世紀の東方学』 人文科学研究所 三月

●「進化論」受容の社会的・文化的文脈にかんする学際的・比較研究(平成12・13年度科学研究費補助金研究成果報告書) 人文科学研究所 三月

坂本 優一郎

オランダ資金と大西洋貿易 ——一八世紀後半イギリスの国際取支をめぐる—— 『洛北史学』 第四号 六月

財政軍事国家とスコットランド ——一九世紀前半の周辺地域政策と国家の変容—— 『人文学報』 第八七号 十二月

財政軍事国家とスコットランド ——一九世紀前半の周辺地域政策と国家の変容—— 『人文学報』 第八七号 十二月

財政軍事国家とスコットランド ——一九世紀前半の周辺地域政策と国家の変容—— 『人文学報』 第八七号 十二月

佐々木 克

文人変貌論(座談会「明治文学史」)

『文学』1・2月号 岩波書店 一月

書評『三重県史 資料編近世4(下)』

『三重県史研究』一七号 三月

安政末・万延期における薩摩藩の政治運動 『明治維新期薩

摩藩の政治動向をめぐる総合的研究』

科研・研究成果報告書 三月

『禁門の変』「熊本洋学校」『明治十四年政変』「西郷隆盛伝

説』『歴史でみる日本』

NHK教育セミナー二〇〇二年度テキスト 三月

まぼろしの帝都大阪・明治維新と首都をめぐる物語り

産経新聞 六月三日

『近代湖国の夜明け』『近江の国から滋賀県に』『琵琶湖疎水』

『大津事件』 『近代の滋賀』滋賀民報社 九月

佐野 誠子

五行志と志怪書——「異」を巡る視点の相違——

東方学 第一〇四輯 七月

雑伝書としての志怪書 日本中国学会報 第五四集 十月

曾布川 寛

内藤湖南『支那絵画史』解説 筑摩学芸文庫 四月

キトラ古墳壁画の十二支像 明日香風 第八五号 十二月

高木 博志

江戸時代は観光スポット——京都御所、公家参内を庶民が見

物 近代における古代文化の復興 『E』 京都新聞 二月六日

近代における古代文化の復興 『E』

ポラ文化研究所 八七号 三月

近代天皇制と古代文化——「国体の精華」としての正倉院・

天皇陵

岩波講座『天皇と王権を考える』五 岩波書店 七月

創り出された「京都らしさ」 京都新聞 十一月十四日

●『文化財と近代日本』(共編著) 山川出版社 十二月

高階 絵里加

肖像と記憶——横山大観『陶靖節』——をめぐって

『人文』第四九号 三月

ルーヴル美術館作品解説パネル(翻訳)

イコン(聖画像)の芸術 など4点 ルーヴル美術館 四月

竹内栖鳳『ヴェニス』 『國華』五月

一八八〇年代、日本からフランスへ——山本芳翠とパリの文

人たち—— 『青淵』七月

明治三十年代の日本絵画における大気・空間表現——栖鳳・

大観と西洋絵画——

『美術フォーラム21』第七号 十二月

高田 時雄

敦煌發現の多種語言文獻 『敦煌學與中國史研究論集』——紀

テルネン・デッケ／樓／重源／ヴォールト天井／烏頭門／
楹／影壁／花塔／観／穹窿／窟檐／経幢／月台／卷殺／卷
棚／孔橋／工字殿／工程做法／金剛宝座塔／鴟吻／人字拱
／穿鬪式／大木作／擡梁式／天宮樓閣／版門／復道／仏殿
／廡殿／鋪地／慢道／無梁殿／陽馬／李誠／櫺星門／檉
方／盞頂／頤和園／雲巖寺／雲居寺／慈恩寺大雁塔／棲霞
寺舍利塔／薦福寺小雁塔／報恩寺／白馬寺齊雲塔／仏宮寺
釈迦塔／隆興寺／雲隱寺／靈巖寺／垂木／束／棟木／母屋
桁、ほか七九項目 同右

中国建築知識東伝日本の媒介 東北亜研究論文系列 一六 八月
中央研究院亜太研究計画 (A P A R P) (台北)

田中雅一

發達における儀礼の意義『教育と医療』

(通卷五八四号) 二〇〇二年二月号 二月

●『供犠世界の変貌 南アジアの歴史人類学』 法蔵館 二月

●編著『個をめぐるミクロ人類学確立に向けての基礎的研究
対象・研究者・パラダイムの連関的考察 平成十年度』平

成十二年度 科学研究費補助金基盤 (B) (2) 研究成果報

告』 京大人文研 三月

ミクロ人類学の課題 田中雅一編『個をめぐるミクロ人類学

確立に向けての基礎的研究』 京大人文研 三月

スリランカ地曳網漁をめぐる抵抗の民族誌 市場経済・親

族・個人 田中雅一編『個をめぐるミクロ人類学確立に向

けての基礎的研究』 京大人文研 三月

人類学の親族研究における進化概念の受容 阪上孝編『進化

論 受容の社会的・文化的文脈にかんする学際的・比較研

究 平成十二年度、平成十三年度 科学研究費補助金基盤

(B) (2) 研究成果報告書』 京大人文研 三月

人類学のフロンティア・ラインを歩く 在日米軍を中心とする軍

事共同体の人類学的研究『人文科学研究のフロンティア

京都大学人文科学研究所要覧 二〇〇一年』 三月

あなたは贈り物を捨てられますか? フェティシズム研究の

射程『人文科学研究のフロンティア 京都大学人文科学研

究所要覧 二〇〇一年』 三月

キンゼイ研究所を訪ねて 『所報 人文』第四九号 三月

●『植民地主義と人類学』(山路勝彦との共編著)

関西学院大学出版会 五月

ヒンドゥー寺院の法人人類学—チダンバラム・ナタラージャ

寺院の事例をめぐる(一八五〇—一九八〇) 山路・田

中編『植民地主義と人類学』 関西学院大学出版会 五月

南インドの太陽崇拜—タイ・ポンガル祭をめぐる 松村

一男・渡辺和子編『世界の太陽神と太陽信仰』

ITIHON 六月

サブジェクトとエイジェント 綾部恒雄編『文化人類学最新

術語一〇〇』 弘文堂 七月

主体からエイジェントのコミュニケーションへ 日常実践への視

角 田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィ

語り・コミュニケーション・アイデンティティ』

世界思想社 九月

富永茂樹

群集『事典 哲学の木』

講談社 三月

●文化社会学への招待——〔芸術〕から〔社会学〕へ（亀山佳

明・清水学と共編）

世界思想社 四月

記憶の重層——パトリック・モディアノ『新婚旅行』その他

前掲『文化社会学への招待』所収 四月

ピエール・ロザンヴァロン『政治的なものの近代・現代史

上・下』（翻訳および訳者附記）

みすず 第四九九・五〇〇号 一〇・十一月

魅力ある都市の条件〔環境図式〕の観点から『新・都市の

時代——都市のり・デザイン／行ってみよう都市の形成』

千里文化財団 十一月

富谷 至

二〇〇一年法学部東洋法史講義から

京都大学高等教育叢書一四 三月

二〇〇一年夏 島根大学東洋史集中講義から

歴史学通信 二五・二六 六月

二〇〇一年日本の中国古代史（秦漢至六朝）研究

周秦漢唐文化研究 第一輯 十月

●中国人物列伝

テーマ解説 富谷至・木田知生編『中国人物列伝』

恒星出版 十一月

人の性は善？ それとも悪？ 富谷至・木田知生編『中国人

物列伝』

恒星出版 十一月

秦の趙高——史実と虚構のはざま 富谷至・木田知生編『中

国人物列伝』

恒星出版 十一月

三国時代の歴史的意義 京都大学人文科学研究所共同研究公

開シンポジウム

石刻が語る三国時代 十一月

李斯と篆書の制定

しにか 十二月

藤井 律之

朱字のミステリー——王基碑—— 京都大学人文科学研究所

共同研究公開シンポジウム 石刻が語る三国時代 十一月

藤原 辰史

もうひとつのチャヤノフ受容史——橋本佐左衛門の理論と

実践

『現代文明論』（京都大学人間・環境学研究所現代文明論研究

室） 第三号 三月

書評・小岸昭『マラーノの系譜』『ナマール』（日本ユダヤ

文化研究会）第七号 十月

船山 徹

On the Date of Vinīadēva. Raffaele Torrella (ed.), *Le*

Parole e i Marmi: Studi in Onore di Raniero Gnoli nel

suo 70° Compianno, Roma: ISIAO, 2001

Two Notes on Dharmapāla and Dharmakṛti Zimbun.

Annals of the Institute for Research in Humanities,

Kyoto University 35 (2000), 2002

捨身の思想——六朝仏教史の一断面——

東方学報 京都七四 三月

五六世紀の仏教における破戒と異端 麥谷邦夫編『中国中世社会と宗教』 道氣社 四月

「漢訳」と「中国撰述」の間——漢文仏典に特有な形態をめぐる—— 仏教史学研究 四五巻一号 七月

古松 崇志

『勅修百丈清規』 版本小考

『古典学の再構築ニユーズレター』 第二二号 九月

禅籍と五山版 (共編) 『学びの世界——中国文化と日本』 京都大学附属図書館 十月

前川 和也

粘土板記録システムの成立と伝播

『西アジア考古学』 第三号 三月

南メソポタミアから見たウルク・ワールド・システム

『西アジア考古学』 第三号 三月

真下 裕之

古典の写本(9) ムガル朝のペルシア語写本

『古典学の再構築』 第十号 一月

アクバル・ナーマ、アブルファズル、シエール・シャール、シヤール・ジャハーン、ジャハーンギール、スイルヒンディー、スール朝、ダーラー・シコー、フマーユーン、マンサブ

『岩波イスラーム辞典』 岩波書店 二月
アワド朝、グジャラート

●英国・アイルランド王立アジア協会の単行書シリーズについて
『新イスラム事典』 平凡社 三月
Edition Synapse 四月

The discrepancy of chronology of *Tibagat-i Akbari*: An introduction to a survey of manuscripts. *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 35 (2000), 2002

水野 直樹

●『歴史教科書の可能性——「つくる会」史観を超えて——』 (共編) 青木書店、二月

植民地支配と「人の支配」、植民地史研究の新たな視座

『人文科学研究のフロンティア』

(京都大学人文科学研究所要覧二〇〇一年) 三月

呂運亨、東北抗日連軍など二三項目 和田春樹・石坂浩一編

『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』 岩波書店 五月

朝鮮植民地支配と名前の「差異化」——「内地人ニ紛ハシキ姓名」の禁止をめぐる—— 山路勝彦・田中雅一編著『植民地主義と人類学』 関西学院大学出版会

(京都大学人文科学研究所共同研究報告) 五月

在日朝鮮人の参政権——歴史と展望—— 『外国籍市民の参政権を考える連続講座』

(民族差別と国籍を考える京都の会・発行) 六月

教科書の中の在日外国人『二〇〇一 多民族共生人権研究
集会報告集』(同実行委員会) 六月

朝鮮における治安維持法体制の植民地的性格 国際学術大会
論文集『東アジアにおける法、植民地主義、近代性』
韓国法史学会 九月

歴史の「見直し」は進むか

『現代思想』絵特集「日朝関係」十一月

宮 紀子

大元ウルスの言語資料と出版文化

京都大学大学院文学研究科博士学位請求論文 三月

『廟学典礼』簡記

東方学 第一〇四輯 七月

出版文化のコスモロジー——中国から朝鮮・日本へ——
(共編)『学びの世界——中国文化と日本』京都大学附属図

書館 総合博物館 大学院文学研究科

附属図書館の珍本——公開展示『学びの世界』の展示から

—— 静脩 Vol.39 No.3

十二月

宮宅 潔

辺境出土簡研究の前提——敦煌の穀物関連簡より——(発表
摘要)

『中国出土資料研究』第六号 三月

春秋の五霸 覇者の時代

富谷至・木田知生編『中国人物列伝』 恒星出版 十月

新の王莽 篡奪を演出した男

富谷至・木田知生編『中国人物列伝』 恒星出版 十月

麥谷 邦夫

◎道樞一字索引 共編

◎中國中世社會と宗教 編者

眞父母考——道教における眞父母の概念と孝をめぐる——
『中國中世社會と宗教』 四月

村上 衛

(翻訳)呉密察『第四章台湾 一〜四』『世界歴史大系 中国
史5』 山川出版社 六月

新刊紹介・古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』
『史学雑誌』第一一一編十一月 十一月

森 時彦

辛亥革命前後河北省新河県の人口動態

中国史学会編『辛亥革命与二〇世紀的中国』

中央文献出版社 八月

守岡 知彦

『文字データベースに基づく文字オブジェクト技術の構築』
平成十三年度「未踏ソフトウェア創造事業」開発成果論文
(<http://www.ipa.go.jp/NBP/13nendo/reports/explor-at/charadb/charadb.pdf>)

「文字知識に基づく文書処理環境の現状と未来」Linux
Conference 2002, (<http://lc.2002/papers/morioka0919p.pdf>)

九月

「ポスト文字コード時代の文書処理技術に関する展望」全国
文獻・情報センター人文社会科学学術セミナーシリーズ
No.12 「データベースの活用と人文社会科学」 十一月

森本淳生

L'imaginaire valéryen et le schématisme kantien, in *Valéry,
en somme* (Colloque à Sète, 9-11 mai 2000), éd. Serge
Bourjca, *Bulletin des études valéryennes*, nos. 88/89,
L'Harmattan, nov. 2001

文学と「日本的なるもの」——小林秀雄における「日本回
帰」上野成利編著『二十世紀前半における「危機」と
「脱近代」をめぐる諸言説に関する総合的研究』(科学研
究費補助金(基盤研究C)) 研究成果報告書) 三月
●小林秀雄の論理——美と戦争 人文書院 七月

安岡孝一

文字を0-1信号に置き換える——文字コードの過去・現在・
未来 日経 NETWORK 二月

全国漢籍データベースの設計とその運用 京都大学大型計算
機センター第六九回研究セミナー報告 三月

現代の文字コード 夏のデータベースワークショップ
DBWS2002 七月

全国漢籍データベースの設計とWWWでの運用 全国文
献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ
No.12 「データベースの活用と人文社会科学」 十一月

山室信一

アジアに日本はどう向きあうべきか 『環』 第九号 四月
歴史の読み方・書き方——李泰鎮教授との応答

『アジアの歴史認識と「信」』東京大学教養学部 五月
戦後日本の中国認識基軸的転移 復旦大学日本研究中心
『戦後日本の社会思潮与中日関係』 五月

満洲・満洲国をいかに捉えるべきか 『環』 第一〇号 七月
日中の枠超え、アジア共同体へ 朝日新聞九月十八日
走世界・中国における政治空間の重層 『現代中国研究』 第二一号 九月

アイデンティティーズのアイデンティティ
New Paradigm No.33 一〇月

長崎暢子ほかと討論「今、問い直す——認識課題としてのア
ジア」 『アジア新世紀』岩波書店第一卷 十一月
空間アジアをめぐる認識の拡張と変容 『アジア新世紀』 第一卷 十二月

山本有造

「満洲国」——ある歴史の終わり、そして新たな始まり——
環 Vol.10 七月

横山俊夫

どこまでもおおきな数——それなら京都からですわ——(京
都アスニー開館二十周年記念特別講座 第五回 二十一世
紀の花鳥風月——京都からの提言——/企画・編集)「創

造する市民」第七十号 京都市生涯学習振興財団 一月
礼儀作法 「歴史学事典」第9巻 法と秩序 弘文堂 二月
挨拶「会誌」49 財団法人竹中育英会 二月
NYで茶の湯のいやし／「新しさ」を提示（談）

●「鮫島尚信在欧外交書簡録」 鮫島文書研究会（松田清氏と共編） 京都新聞（夕刊）二月二十三日
フレデリック・マーシャルと鮫島尚信（右記書簡録所収） 二月

●媒介者の復権（三浦國雄氏と共編）
「人文学報」第八六号／共同研究班特集号 三月
大雑書考——多神世界の媒介——（右記人文学報所収） 三月

●「前近代久米島文化の復元——未公開の家文書群の学際的実地検証をふまえた解説による——」平成十一—十三年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（A）（1）課題番号 11309005 研究成果報告書 三月
上江洲家の語彙集——久米島書物文化の一断章——（右記報告書所収） 三月

●「前近代久米島文化の復元 上江洲家・與世永家・吉濱家・宮城家文書目録」平成十一—十三年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（A）（1）課題番号11309005 研究成果報告書 別冊1（島尻克美氏・玉木順彦氏・都築晶子氏と共編） 三月

●「京都大学大学院地球環境学舎・地球環境学舎・三才学林／

Kyoto University Graduate School of Global Environmental Studies」（共編著）

大学院地球環境学舎・学舎・三才学林 四月十九日
「三博覧会」検討会（第1回—第4回会議録／森谷尅久氏・加藤和人氏・高田公理氏ほか）

財団法人 平安建都千二百年記念協会 七月
「学校が変わるとき」第3部「いま京大で」4（談）

京都新聞 七月二十八日
世界遺産と空、世界遺産解説、「異才・木田安彦展」所収 京都新聞社 十月

節用集みたいなお人／よばひほしを漢字で／節用集は男だけのものか／かくしどころは「雅な」字で／名付けは文明のかなめ、連載・節用の日本文明 其の一—五、「ひととき」第2巻第8—12号

株式会社ジェイアール東海エイジェンシー 八—十二月
松下電工カレンダー 世界遺産と空 松下電工二〇〇三年カレンダー「木田安彦ガラス絵の世界」前文、図版解説 松下電工 十二月

●The Kyoto/Seoul Symposium on Linguistic Challenges in the Modern Sciences: First Movement at SANSAL GAKURIN, Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University, 4th-6th July, 2002-an interim report - / co-edotorship with Yung Silk Kim, Occasional Seminar Reports of the Institute for Research in Humanities, No. 7, The I. R. H., Kyoto Uni-

versity.

十二月

Civilising the Usage of the Word, *Civilisation*, in T.

Yokoyama & Y. S. Kim, op. cit.

十二月

天地人が和樂する文明を「提言」

京都新聞

十二月三十一日

本研究所では1997年からホームページを設け、研究所に関するさまざまな情報の提供が行われ、研究所紹介と所員の研究活動紹介をはじめ、図書室・出版物・紀要・講座などの案内が掲載されています。

トップページには本研究所要覧『人文科学研究のフロンティア』がPDFで公開され、また、電子版工具書（道気社・麥谷邦夫）、戦後日本における朝鮮史文献目録（水野直樹）、ミクロ人類学関連データベース（田中雅一）、WWW Database Chinese Buddhist Text (C.Wittern)、漢字袋（安岡孝一）など研究者にとって有用なコンテンツが提供されています。

さらに附属漢字情報研究センターのページには、東洋学文献類目検索や全国漢籍データベース、本研究所所蔵石刻拓本資料、西域行記データベース、などの学術データベースもあり、研究支援に努めています。

本誌『人文』も全文を掲載していますので、是非一度ご覧下さい。

URL は以下のとおりです。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>



[最新](#) [講演会](#) [研究所](#) [研究活動](#) [図書室](#) [出版物](#) [アーカイブ](#) [目次](#)

[\[English page is here\]](#)

[附属漢字情報研究センター](#)

● [人文科学研究所紹介](#)

- 沿革
- 組織・機構
- 交通と地図
- 蔵書と資料

お 知 ら せ

● 『人文科学研究のフロンティア』
(PDF on line版)

● [研究活動](#)

- ◆人文学研究部
 - 個人研究
 - 共同研究
- ◆東方学研究部
 - 個人研究
 - 共同研究

● [図書室](#)

- お知らせ
- 利用案内
- 蔵書

● [出版物](#)

● [紀要](#)

- 東方学報
- 人文学報
- 欧文紀要

● [所報『人文』](#)

● [電子アーカイブ](#)

● [公開講座・講演会](#)

● [海外の東方学研究者による人文科学研究所の教育研究活動についてのレビュー](#)

● [教職員のホーム・ページ](#)

● [研究報告書](#)

● [更新履歴](#)

● [他のサーバへのリンク](#)

● [人文研内部限定サイト](#)



-人文科学研究所要覧2001年-



分館



本館

このホームページに関するお問い合わせは webmaster@zinbun.kyoto-u.ac.jp

[京都大学のホームページへ](#)

人
文

第五〇号
二〇〇三年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品